

# つくば市民レポーターが 目指すもの

つくば市民レポーター編集会議  
設立記念シンポジウムの記録



つくば市民レポーターが  
目指すもの  
つくば市民レポーター  
編集会議設立記念シン  
ポジウムの記録

独立行政法人  
防災科学技術研究所

独立行政法人 防災科学技術研究所  
防災システム研究センター  
災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト  
(BOSAI-DRIP)

# はじめに

防災科学技術研究所は、災害に強い社会の形成を目指して、災害に関する自然現象の解明や観測に関する研究から、個人や地域コミュニティの防災力を高める技術や社会のしくみに関する研究まで、防災に関する総合的な研究開発に取り組んでいます。その研究の一環として、今回、つくば市民レポーター編集会議及びコミュニティFM局のラヂオつくばと協働で、市民レポーターの今後の活動のあり方を考えるシンポジウムを開催することができました。

いつ、どこで、どの程度の規模の被害が起きるかを正確に予測することは現在の科学技術では不可能です。このような災害リスクの不確実性に対する備えを高め、また、災害が発生した場合に被害を軽減するためには、行政のみならず地域社会を構成する多様な主体が協力し連携することが不可欠と考えます。このような多様な主体が協働してリスクに備える社会の状態を「リスクガバナンス」とよびます。このリスクガバナンスを高めるためには、日ごろから地域の環境や福祉、子育て、まちづくりなど、さまざまな生活課題を解決するためのネットワークづくりや、多様な社会資源を災害時に防災資源として活用できる関係づくりがきわめて有効だと思います。

つくばでスタートした市民レポーターの取り組みは、地域の共同取材や編集活動を通じて、さまざまな社会資源を発見し組み合わせて地域の課題を解決し地域の価値を高める「地域プロデューサー」として活躍されることが期待されます。また、市民協働や地区自治を支援するサポーターとしての役割も期待されます。さらには、災害時には、災害市民レポーターとして、日ごろから取材を通じて形成された顔の見えるネットワークやラジオやインターネットなど多様な地域メディアとの信頼関係を活かして、被災生活に不可欠な生活情報を発信・集約する役割も期待されます。

今後とも、つくば地域のリスクガバナンスの向上に向けて、つくば市民レポーターの方々、ラヂオつくばをはじめとする地域メディアの方々と協働してゆきたいと思います。

最後になりましたが、つくば市をはじめ、本シンポジウムにご協力、ご支援いただきましたつくば地域の方々に、心より感謝申し上げます。

平成21年10月23日

共催者を代表して

独立行政法人防災科学技術研究所

災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト

リスク研究グループ長 長坂 俊成

# 目次

はじめに .....	1
1. つくば市民レポーター編集会議設立記念シンポジウム .....	4
開会挨拶／趣旨説明 .....	6
第1部 つくばの見える化と地域の編集 .....	8
(1) 学生と地域の協働～学生とともに、地域が育つ～	
(2) つくば37スクール・コミュニティ・プロモーション ～心のランドマーク「山口小学校」～ビデオ取材	
(3) つくば100選紹介ミッション2009～ひと、もの、こと、つながりの見える化～	
(4) 協働による安全・安心なまちづくり～eコミュニティつくばによる地区自治との協働～	
(5) 国際交流は外国人と地域の協働から～モンゴルのおうちゲルを巡って～	
第2部 総合討論～市民協働による地域プロデュース～ .....	19
(1) ビデオメッセージ 市民レポーターへの期待～平常時と災害時～	
(2) 話題提供「地域ドラマをつくろう！」～地域の見える化とプロデュース～	
(3) ディスカッション	
2. つくば市民レポーター編集会議について .....	38
市民レポーター編集会議発足の経緯とこれまでの取り組み .....	38
「市民レポーター養成講座」の概要 .....	40
●市民レポーター養成講座 ●養成講座を受講して ●市民レポーターについて	
市民レポーターの取り組み紹介 .....	46
3. 「eコミュニティ・プラットフォーム2.0」について .....	48
「eコミュニティ・プラットフォーム2.0」とは .....	48
●eコミで利用できる機能 ●想定しているユーザーと利用方法	
●eコミの管理・運用方法 ●eコミの無償提供とサポート体制	
●実証実験参加団体の公募と参加方法 ●eコミの今後	
eコミマップで地域に役立つマップを簡単作成 .....	53
●eコミマップの5つの特徴	
参考資料 .....	54
災害リスク情報プラットフォームに関する研究開発の紹介	

# 1. つくば市民レポーター編集会議 設立記念シンポジウム



日 時：平成 21 年 6 月 27 日 (土) 13:30～16:30

場 所：つくば国際会議場 中ホール 300

テーマ：市民レポーターが地域を編集する

—市民の自治と協働を支えるもうひとつのアプローチ—



## 【プログラム】

※総合司会：増田和順(つくばコミュニティ放送㈱ 代表取締役社長)

1.	13:30-13:45	開会挨拶 趣旨説明	「市民レポーターが地域を編集する」 増田和順(つくばコミュニティ放送㈱ 代表取締役社長)
2.	13:45-13:50	来賓挨拶	岡田久司(つくば市副市長)
3.	13:50-14:45	第1部 発表	<p>第1部 つくばの見える化と地域の編集</p> <p>(1) 学生と地域の協働～学生とともに、地域が育つ～ 武田直樹(筑波学院大学社会力コーディネーター)</p> <p>(2) つくば37スクール・コミュニティ・プロモーション ～心のランドマーク「山口小学校」～ビデオ取材 田辺和夫(茨城レスキューサポート・バイク会長)</p> <p>(3) つくば 100 選紹介ミッション 2009 ～ひと、もの、こと、つながりの見える化～ 永井悦子(市民レポーター編集会議世話人代表)</p> <p>(4) 協働による安全・安心なまちづくり ～eコミュニティつくばによる地区自治との協働～ 河原井猛(つくば市社会福祉協議会福祉主任)</p> <p>(5) 国際交流は外国人と地域の協働から ～モンゴルのおうちゲルを巡って～ 大木喜子(つくば都市振興財団国際交流協会担当)</p>
4.	14:45-15:05	人形劇	耐震人形劇～人形劇で地域の課題や知恵を共有～ 幸田真希(聖徳大学短期大学部教授)
-	15:05-15:20	休憩	地域防災支援ツールの紹介デモ (防災科学技術研究所)
5.	15:20-16:25	第2部 討論	<p>第2部 総合討論～市民協働による地域プロデュース～</p> <p>(1) ビデオメッセージ 「市民レポーターへの期待～平常時と災害時～」 中川和之(時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長)</p> <p>(2) 話題提供「地域ドラマをつくろう！」 ～地域の見える化とプロデュース～ 長坂俊成(防災科学技術研究所主任研究員)</p> <p>(3) ディスカッション コーディネーター：増田和順(つくばコミュニティ放送) パネリスト： 長坂俊成(防災科学技術研究所) 永井悦子(市民レポーター編集会議) 他、市民レポーター及び市内区長(調整中) コメンテーター：地域外から参加予定</p>
6.	16:25-16:30	閉会挨拶	長坂俊成(防災科学技術研究所)

## 開会挨拶/趣旨説明

### 市民レポーターが地域を編集する

増田和順さん

(つくばコミュニティ放送株式会社代表取締役社長)



こんにちは。「ラヂオつくば」の増田と申します。会社の正式名称は「つくばコミュニティ放送株式会社」ですが、運営しているラジオ局の通称が「ラヂオつくば」ですので、通常はこの名称を名乗っております。「ラヂオつくば」は、2008年の10月10日につくば市の吾妻で認可された放送局です。いまNHKの連続テレビ小説「つばさ」の舞台になっているのは、小江戸・川越にあるコミュニティ放送局ですが、同じようにつくばという地域に特化した放送局です。

さて、本日は「つくば市民レポーター編集会議」設立記念シンポジウムということですが、つくば市民レポーター編集会議は、市民が運営する市民団体のひとつです。市民レポーターの方々がレポートして下さったさまざまな情報を「ラヂオつくば」で放送させていただき、こうした情報を提供することで、さらにそれを聴いた市民がその情報を活用するという共助関係にありま

す。したがって今回は、このシンポジウムをNIEDとともに支援させていただきました。

ところで、なぜつくば市民レポーター編集会議に私どもが注目するかということについてお話しておきたいと思います。報道というものは、だいたいがプロの記者が現地に行って、見たり聞いたりしたことをプロの目線で書いて一方的に配信するのが普通です。ですから、例えばつくばのような広大な地域ですと、マスメディアの目線は中心地区にある大きなビルや大きなイベントなど、どうしても目立つものに行きがちです。

しかし実は市民にとって一番役に立つ情報というのは、小さなイベント、もしくは小さなヒーロー、そして小さな物事だったりするわけです。例えば、「国道が止まっています」という情報は別段「ラヂオつくば」で放送しなくても大きいメディアで放送されますが、「市道が工事で通れません」という情報は市民にとって非常に重要な要素であるわけですが、マスメディアでは放送されません。

市民の目線、学生の目線、子どもの目線でとらえた情報を報告する場所があり、そこで報告された情報を私たち「ラヂオつくば」が拝見し、これは

他の市民に伝えたほうが良いなど判断したものを放送する。市民の声や、市民の目線で得られたものを、選別させていただき、それを放送というかたちで情報提供することで、また市民にお返ししていく。これはラジオ局に限らず、ホームページやあるいは以前からNIEDとつくば市が共同研究として市民の方と一緒に運営している「eコミュニティつくば」でも同じようなかたちでやっています。

「eコミュニティつくば」では、NPOや市民活動グループが主役になって動いていますが、さらに市民一人ひとりの目線での情報を取り入れていこうという取り組みが、このつくば市民レポーター編集会議であり、「ラヂオつ

くば」も非常に期待しております。

さらにNIEDからは、地域のさまざまな問題を解決し、災害に強い地域づくりを目指すには、日常の市民同士の関係性の構築が極めて重要であり、それが基盤になっていくのではないかと注目いただいています。こうしたことから、NIEDの先生方のご協力も得て、私ども「ラヂオつくば」は、市民レポーター編集会議において一緒に実証実験をさせていただいています。

今日は発表者の皆さんから非常にわかりやすくおもしろい報告をいただけることを楽しみにしています。ビデオなども駆使してインタラクティブに進めてまいりますので、どうかよろしくお願いたします。

### 来賓あいさつ

岡田久司さん(つくば市副市長)



開会にあたり、つくば市副市長の岡田久司さんからご挨拶いただきました。つくば市は平成17年から、災害に対処し防災に取り組むために地域としてどのように連携できるのか、あるいは情報を共有できるかについてNIEDと共同研究を行っており、その過程で「eコミュニティ」に取り組むことになりました。その結果が、コミュニティFM「ラヂオつくば」の設立にもつながったとのこと。

「現在つくば市には約800のグループ、7000人ほどが自警団として活動しております。“自分たちの町を自分たちの手で守る。”というこうした市民の思いや行動が自治の基本であり、それが安心・安全のまちづくりの核になると考えています。つくば市は、市民と共に歩むための協働ガイドラインを策定しましたが、新たな連携を模索し、そして実現を目指して実践しています。災害は、いつどこで、どのような形で起こるのかわかりません。災害が起きた時にどうすれば、地域の情報を一人ひとりに届けることができるのか。今回の市民レポーター編集会議の活動にも大いに期待しています」とご挨拶いただきました。

## 第1部 つくばの見える化と地域の編集

### (1) 学生と地域の協働

～学生とともに、地域が育つ～

武田直樹さん  
(筑波学院大学社会力  
コーディネーター)



筑波学院大学の武田と申します。私は大学のオフ・キャンパス・プログラム推進室という部署で社会力コーディネーターという仕事をしております。社会力コーディネーターとは、端的に言いますと、学生に社会力をはぐくませ、その中で学生と市民活動団体との橋渡し役をする、という仕事です。

本学の教育の目標のひとつに、「社会力のある学生を育てていこう」ということがあります。「社会力」という言葉は門脇前学長が作られた言葉ですが、さまざまな人と協力をしながら、よりよい社会をつくっていくための力をはぐくんでいこうということです。アメリカのオバマ大統領も大統領選のときに「社会を動かす力」と言っていましたけれども、それと同じだと思っています。人間として、根幹、幹の部分がしっかりしていれば、多少の荒波でもくじけることはないだろう。自分がどういう方向性の中で生きていくの

か、ということから自らの社会体験を通して見つめ直してほしいということを教育目標としています。

具体的には、つくば市全体をキャンパスと考えて、全学生が社会参加活動を必修科目としています。この取り組みは平成17年度から行っていき、今年度が5年目になります。社会参加活動が3年間必修というのは画期的なプログラムで、学年ごとにステップアップする形になっています。

1年生の実践科目Aは、まずは社会の動きを体験してみようということで、1回型の社会参加体験としていきます。2年生の実践科目Bでは、ある団体に参加して中長期的に30時間以上の活動を行い、社会の動きを学びます。3年生の実践科目Cでは、自分が一番やってみたい企画を市民の方々と協働しながら実践していきます。

全体の流れとしては、1年生の実践科目Aが、「ふれあい型」あるいは「体験型」プログラムで「知る・体験する」をテーマとし、2年生では「中長期型」あるいは「一定のタスクや目標を持ちそれを達成していく」プログラムで「学ぶ」がテーマ、3年生の実践科目Cは「自己実現型」あるいは「自分のやりたいことを実践する」プログラムで「試す」をテーマにしています。

4年間実施して、これまでに情報・科学、国際、環境、福祉、社会教育、スポーツ、文化、まちづくりなどにかかわる行政、民間、市民活動団体、財団法人などさまざまな約100団体に、700名ほどの学生を受け入れていただきました。中には複数の団体で活動を行った学生もいましたし、参加してみてももしろかったからということで、いまだに活動を継続している学生もいます。あるいはまた、卒論や進路に結び付ける学生も少なからずおります。具体的には、ライフセービングや障害者アート、中学校の図書館の運営サポート、インターネットテレビ放送などの活動がありました。

それから、必修科目として取り組んでみてどうだったのかということについて、学生自身がアンケート調査を行ったのですが、その結果、8割の学生が「やってみてよかった」と回答し

ています。

ネガティブな回答は2割弱ということで、実際に社会に出てみるとおもしろいな、ということに学生が気づいてくれたのではないかと思います。一方で受け入れ先の団体はどのように感じられたのか。実際に学生の活動が役に立ったかどうかという点では5点満点で4.4点、社会力の向上に役立ったかどうかというところで4.2点でした。

私どもとしては、学生の動機付け、モチベーションを上げた中でいかに外に送り出すかというところが難しくもあり、やりがいがあるところでもあります。

3年間の社会参加活動を全学生の必修科目にしている大学は、日本では筑波学院大学以外にありません。

私の知人で、アメリカやイギリスで働いている、こうしたフィールドの



コーディネーターはいますが、海外でもここまでやっている学校は聞いたことがないということです。世界でも稀な体験学習プログラムだと思います。3年間を通して市民性、社会力と言ったほうがいいかもしれませんが、本学はそれを徹底してはぐくんていこうという大学です。

さらに申し上げたいのは、市民と一緒に作り上げているプログラムであるということです。100近い受け入れ協力団体の中で、学生が活動する過程で、さまざまな意見をいただきながら今日までやってきましたが、単に大学がやっているプログラムではなくて、学生のまちづくりへの貢献という意味も含めて、市民の皆さんと一緒に作り上げてきたと思っています。

筑波学院大学の学生はほとんどが県南地域の出身で、地元の学生が多い。これは強みだと思っています。この強みを生かして、地域の学生が地域の活動に参加することによって地域で育っていくということ、そしてひいては、将来このつくばを中心とした地域の担い手を育成することにつながるのではないかと考えています。ですから市民の皆さんにも、学生について厳しく見守っていただき、また教育的な観点でもいろいろとご指導いただければと思います。

今後は学生にどう動機付けをして社会参加をさせていくのかということ、また専門性やアカデミックな部分、つ

まり他の授業とのつながりをどうつけていくのかについてさらに掘り下げていきたいと思っています。外部とかかわって「よかった」で終わってしまうのではなく、それをどう次のステップにつなげていくか、また将来のキャリア、就職などの短期的な部分、自分の人生をどう生きるのかといった長期的な部分とのつながりをどうしていくのか。あるいはまたプロジェクトの継続性をどうするのか。長く続けることで出てくる波及効果もあると思いますので、それは大事にしていきたいですね。

## (2) つくば 37 スクール・コミュニティ・プロモーション ～心のランドマーク 「山口小学校」～ビデオ取材

田辺和夫さん  
(茨城レスキュー  
サポート・バイク会長)



つくば市には 51 の小中学校があります。そのほとんどの校歌に「筑波山」が歌われていますが、調べてみるとたった 1 校だけ「筑波山」が校歌に入っていない学校がありました。なぜなのか、と思い、その学校にビデオ取材をしてきました。その小学校は山口小学校といまして、北条大池のすぐ

そば、不動峠の上り口であり、北条米という有名なお米が取れる場所でもあります。

北条大池から山口小学校に向かう細い道があり、左手の川のほとりでは今の時期ホテルが見えるそうです。ご覧のとおり、つくばにこんな田舎があるのかというくらい田舎です。

6月の初めに取材をさせていただいたのですが、全校生徒が集まって体育館で校歌を歌うところを録画しました。

全校生徒といっても 23 名で、内訳は 6 年生 8 名、5 年生 3 名、4 年生 7 名、3 年生はゼロで、2 年生 2 名、1 年生 3 名です。つくば市の中では一番生徒数が少ない小学校ではないでしょうか。調べましたら次に少ない学校でも 91 名ですから、かなり差がありますよね。

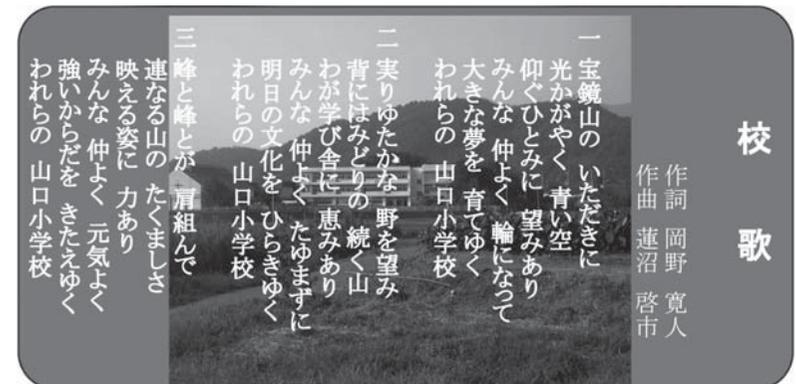
さて、校歌の話ですが、山口小学校の校歌に登場するのは、筑波山ではなくて「宝鏡山」なんです。私も登って

みたのですが、なぜ宝鏡山というかと言いますと、頂上に宝鏡塔というお経が入っている塔があるんです。地元の方は小田山と言っています。宝鏡山の「ほうきょう」は「宝に鏡」と書きますが、本当は鏡ではなく「篋」という難しい漢字です。そしてここからは筑波山はまったく見えません。

子どもたちはみんなとても元気で、苗字ではなく名前呼び合うほど仲が良くてアットホームな雰囲気でした。

現在つくば市内でも多くの小学校が避難所として機能しなければならない状況です。そうすると、耐震や水の確保の問題にもきちんと対応できていなければなりません。市内でも統廃合が進んで廃校になったところもありますが、そういうところでも近隣住民の避難所として役割を果たせるのだろうかということをつくづく思います。

先生方にはご苦労だと思いますが、ぜひこうした役割も地域の中で担っていただきたいと思っています。



山口小学校ホームページより

### (3) つくば 100 選紹介 ミッション 2009 ～ひと、もの、こと、 つながりの見える化～

永井悦子さん  
(市民レポーター  
編集会議世話人代表)



皆さん、こんにちは。市民レポーターの編集会議の世話人を務めさせていただきます、永井悦子です。よろしくお願いたします。

私は3人の子育てをしている普通の母親だったのですが、地域の中でさまざまな問題解決をする上で必要だと感じて、仲間と一緒に「つくば・市民ネットワーク」を立ち上げ、そちらでも活動しております。地域の問題解決はやはり地域でやるべきだ、と思いついて、子育てが終わってからも、自治会やPTAという活動から卒業して、新たにやっていきたいという気持ちもありました。

こうした活動をスタートさせて、実は現在は市議会議員として2期目の議員活動も行っております。議員活動の中で、新潟の震災のときに視察にまいりました。その時に一番印象に残ったのは、「自助」ということです。自力でがんばる姿を見せていただきました。それと同時に、情報の共有が非常

に難しい状況の中で、ローカルのFM放送が非常に役に立ったという報告を受けて、「つくばにもそうした放送局があったらいいな」と思っていたところに、増田さんたちの活動が生まれました。FM放送局の誕生には力をお貸ししたいなと思っていたのですが、それと同時に「ラヂオつくばを利用して、市民レポーターの活動をやってみませんか」とNIEDの長坂さんからご提案いただきました。

市民レポーターというのは、最初意味がよくわからなくて、防災とレポーターがどう結びつくのかと疑問に思ったのですが、よくよくお話を聞いてみると、地域のつながりをつくらうという取り組みだということがわかって、それならば私にもできるかもしれないと思い参加しました。

市民レポーター編集会議は4月、5月と2回の編集会議を重ねて、今日のキックオフを迎えました。2回の会議の中で、「私たちがレポーターとして何ができるのか」について話し合ってきました。しかし何か違ったアプローチを、と考えても頭が固くてなかなかアイデアが出てきません。グルメ案内や行事への参加をレポートしてネットで公開したり、「ラヂオつくば」で取り上げてもらおうということしかイメージがありませんでした。

そんなときにある方が、「つくばのお宝発見をレポートするのはどうだろう」と提案されました。お宝といっても古いものを探すのかと思ったらそう

ではなくて、ヒト、モノ、コト、そしてその周辺をレポートすればいい。

先ほど田辺さんから素晴らしい報告がありましたが、つくばは本当に広いし、いろいろな方が住んでいます。山口小学校のことは知ってはいましたが、子どもたちの元気な様子を見たのは初めてです。その場の雰囲気や空気感が伝わるのは本当にいいなあと思いましたので、市民レポーター編集会議でもそんな取材ができればと感じました。

今日のレジュメに「自らの情報は自らの手で」と書きましたが、つくば市は合併を重ねてきた街ですから、そういう部分も含めて、この活動でさまざまなヒトやモノ、コトをつないでいければいいと思っています。

地域の魅力を発掘し発見して、市民が持つさまざまな目線や観点で地域を見直し、それを文章や画像、動画、WEBなどで皆さんに紹介していきたい。魅力的なレポートができるかどうか、不安なところもありますが、ぜひチャレンジしていきたいと思っています。

さらに、つくば市は景観条例や景観計画を策定していますが、ホームページでも「つくばの景観100～つくば再発見～」として公開し、小冊子も作成しています (<http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/261/1500/677/index.html>)。これはつくば市都市計画マスタープランの策定に協力した市民ワークショップ景観班のメンバーと都

市整備課の職員が協働でつくったものです。

市民レポーター編集会議でも、身近なものを選んで取材して、地域のお宝として発信していきたいと思っています。食文化や、近所にいる名物おじさんや、かけっこが速くて関東大会に出るような自慢の子どもなどを取り上げていきたい。いろいろな課題を探することで、次の100選レポートにつなげていく。こうした情報を共有することによって、地域が少しずつつながりを持つようになるのではないのでしょうか。そして、レポートを聞いたり見たりした市民の方からの反応もまた相互につなげていきたい。

さらに私たち市民レポーターとしては、緊急時や災害時にはその地域の状況をレポートする役割も担っています。ぜひこれからもたくさんの方にレポーターになっていただいて、この活動を続けていきたいと思っています。



(4) 協働による  
安全・安心なまちづくり  
～eコミュニティつくばによる  
地区自治との協働～

河原井猛さん  
(つくば市  
社会福祉協議会  
福祉主任)



つくば市社会福祉協議会の河原井と申します。今年度から地域ケアコーディネーターを務めております。

ここでいう地域ケアというのは、茨城県独自の福祉政策で、県内全市町村に地域ケアコーディネーターを配置して、医療・保健・福祉が連携し、その地域にある福祉の課題を地域の方々の力をお借りし解決していくために実施されています。平成6年から取り組んでいます。平成12年からスタートした介護保険にも大きな影響力を与えた仕組みのひとつ言われています。地域で複数の職種による支援の必要な方を、フォーマル、インフォーマルな社会資源で、地域での暮らしを支えていこうというものです。

今回のテーマでいうところの地域ケアは広い意味でのコミュニティケアとして認識しております。これは元来、社会福祉協議会の、ボランティアパワーをはじめとする住民同士が助け合って課題を解決していこうという考え方が発展したもので、そういう意味

で地域ケアは今回のテーマに即していると考えます。

つくば市社会福祉協議会では地域福祉を推進する機関として従来から地域住民同士のつながりというものを大切に考えてきました。地域のつながりを見直す良いキッカケになると考え、平成18年度から地域防災というジャンルにチャレンジしてまいりました。

まず災害ボランティア、私たちは「防災ボランティア」と呼んでおりますが、その養成からスタートしました。防災についての知識を持っている、そして地域の事情をよく知っている、という2つの要素を融合させ、両方の要素を持った方々が地域にたくさん存在することによって、発災したときに力になっていただけるのではないかと。行政や社会福祉協議会のマンパワーにも限りがありますので、住民の皆さんの自助共助への期待も込めて、ボランティア養成講座を立ち上げました。先ほど永井さんからご説明いただいた市民レポーターの考え方にも非常に近いものがあります。

それから社会福祉協議会には、災害時に災害ボランティアセンターを運営するというミッションがあります。発災時には、全国から集まるボランティアや、地元市民のボランティアなどに協力をいただくわけで、そのコーディネーションを担うことになるわけです。

そうした仕組みづくりのひとつとして、eコミュニティつくばやNIEDの

先生方にも協力いただきながら、災害ボランティアセンター設置訓練を開催いたしました。茨城レスキューサポート・バイク(IRB)、ラヂオつくば、それから障がい者団体のほにゃらキッズなど、いろいろな方々に参加いただき、それぞれの得意分野の活動を訓練に生かしていただきました。

結果としては、予定していたことがほとんどできずに終わってしまったのですが、逆に参加いただいた皆さんや私たち社会福祉協議会の職員が、災害時に対する課題を再発見することができたイベントでもありました。

この訓練では、eコミュニティのマップを使って要援護者の情報を得ようとしたがなかなかうまくいかず、慣れが必要だということを実感しましたし、TIVONAの会や国際交流協会にもご協力いただいて外国人支援にも初めて取り組みました。皆さんそれぞれのミッションをそつなくこなしていただきましたが、私たち社協がうまくコーディネートできなかったという反省があります。参加くださった皆さんにはいろいろとご迷惑をおかけしましたが、おかげさまでこれをきっかけに、皆さんとどのように協働していけばいいのかという大まかなイメージをつかむことができました。

平成19年度は、要援護者の支援に的を絞ってどのように訓練を展開するかを考え、要援護者安否確認に取り組みました。前もって該当する方にお話をして協力いただき、安否確認を行う

という流れなのですが、その工程の中に地域住民や防災ボランティアの方にも加わっていただき、eコミのマップを使い、生活支援袋という土産袋を持参して「お元気ですか?」「お怪我はありませんか?」というように声をかけをしてもらえるかどうかという内容でした。

平成20年度は、共助をテーマに住民主体の防災訓練を実施しました。過去2年間の反省をもとに、区会住民やシルバークラブ、福祉連絡会など従来型ネットワークとの連携が望まれていたことをふまえ、また住民の皆さんが防災について考えるきっかけになるような、住民主体の取り組みを支援していこうということで災害時要援護者安否確認訓練と現地災害ボランティアセンター設置訓練を実施しました。

この訓練は平成20年2月に、荖崎第一小学校で行いました。ここは高崎地区の第二次避難所になる場所で、学校をはじめつくば市からも協力をいただきました。おかげさまで、234名の方に参加いただきました。高崎地区は自主防災組織も発達している場所でもあり、ヘルメット持参で来てくださる方もいらして、かなり盛り上がった訓練になりました。

このときには、徒歩で安否確認ができない場所についてはIRBさんにバイクで行ってもらい、また救援物資を運んでもらうなどのシミュレーションも行いました。

また外国人への支援として、例えば

「食事は12時に配ります」という内容を、国際交流協会の方々に英語、フランス語、ハンゲル語で翻訳していただきました。また初めて避難所の運営支援をやらせていただき、住民の方にシートを敷いたままの上に寝てもらってどう感じるのかを伺ったりしました。

今回の訓練は、さまざまな団体に協力をいただきましたが、実際に独居老人の世帯や高齢者世帯に、小学校のPTAや地域住民が福袋を配布することで、顔の見える関係になり、それが平時の見守りにもつながることを感じていただけたと思います。

また防災ボランティアとして参加してくださった方は地域外の方が多かっ

たのですが、地域外の視点によって、今まで気がつかなかった課題や解決策を発見できたことは大変有意義でした。

最後になりますが、訓練を通して改めてつくば市にはさまざまな主体がいて、それぞれが役割を認識して、しかもつながってこうという気持ちがあるということが、地域防災にとって非常に重要な要素だということがわかりました。講義の地域ケアには、地域防災にも通じるところがあると思います。社協としても、今後とも一生懸命仕事をしていきたいと思っておりますので、皆さんのご協力をよろしく願います。

### (5) 国際交流は外国人と 地域の協働から ～モンゴルのおうち ゲルを巡って～

大木喜子さん  
(つくば都市振興財団  
国際交流協会)



つくば都市振興財団国際交流協会の大木と申します。今日はある日の国際交流協会の話をさせていただきます。

ある日のこと、つくば市国際交流協会の事務所にモンゴル人がやって来ました。そして、「ゲルを置く場所を提供してほしい」と言うのです。そしてそれを聞いた私たち事務局職員とこんな会話が交わされました。「事務所に置けませんか?」「置ける訳あんめな。事務所は満員だ!」「困ったな」「今は雨ざらしなんだっぺ?何とかしてやらねーと...」。「そうだ、顔の広そうな友だちに聞いてみよう」「会議があるからそこで聞いてみよう」などさまざま話がでたのですが、さて実際どうしたものか。

ここで「ゲル」について少し説明させていただきます。ゲルはモンゴルの遊牧民たちが生活するために使っている家です。モンゴルと言えば、日本では朝青龍や白鵬などお相撲さんが有名ですし、食べモノではジンギスカンでしょうか。チンギス・ハーンも日本人

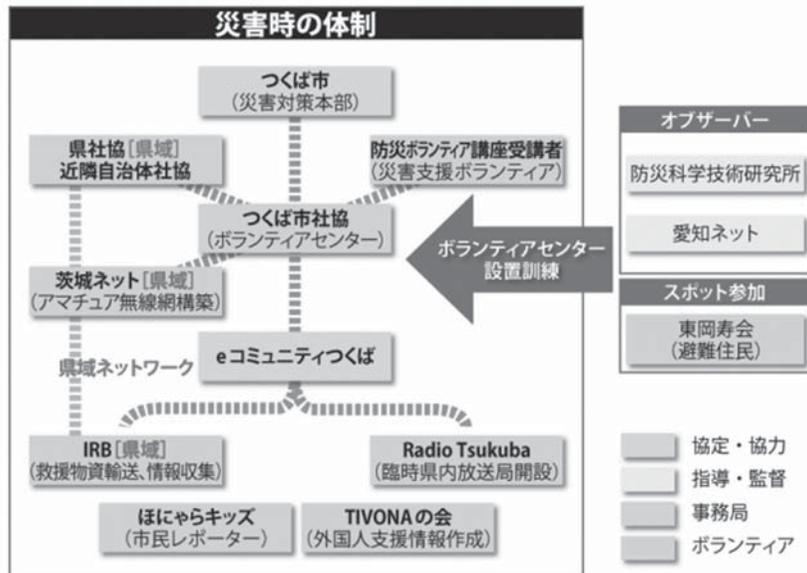
にはなじみがありますね。顔つきも日本人と似通っていて親しみが持てる国だと思います。モンゴルで暮らす遊牧民は、馬や牛を放牧しながら生活していますから、家畜が食べるための草がなくなるとそれを求めて移動していきます。そのために建てることも畳むことも簡単なテント風の家に住んでいます。

さて話を戻して、その後ゲルが結局どうなったかと言いますと、工芸館や昆虫館、宿舍あかまつやキャンプ場などいろいろな設備がある施設「ゆかりの森」に置けるのではないかということになりました。また「ゆかりの森」から、イベントをやるのでゲルを使わせてほしいという希望もあって、運よく話がまとまりました。私たちが「あぁよかった、やっと見つかった」と思いました。

しかし「ゆかりの森」に決まるまでの間に、あちこちいろいろな方に相談していました。その中で、5月9～10日に「つくばフェスティバル」というつくばの春のお祭りで、ゲルのお披露目ができないかという話があり、祭の数日前に「中央公園なら置ける」という話をいただいていたこともあって、その計画を進めることにしました。

いざ置くことになったら、モンゴル人がいないとゲルが建てられないということに気がついて、話を持ってきたモンゴル人に組み立ててくれないかという連絡をしました。彼は学生なのですが、いろいろ忙しくて結局前日の8

### 災害ボランティアセンター設置訓練



日の午後ならやれるという話になったのです。しかしあいにく当日が豪雨になってしまい、それでもとりあえずこの日しかないということで、モンゴル人5～6人とつくばフェスティバルの関係者5～6人の計12人ほどでゲルを組み立てることになりました。



まずは骨組みを作って、その上に、白い布をかぶせるのですが、雨が降っていたことと、骨組みの木がモンゴル産で雨に弱いということもあって、急遽ブルーシートで養生してその上に布をかぶせました。フェスティバル当日は、お天気が良くてよかったのですが、ゲルはブルーシートで覆ったために、室内が暑くなってしまっていて、結局天井の部分を切って穴を開けて空気を通すようにしました。最初はおっかなびっくりの方もいたのですが、子どもたちは「ゲルってなぁに？」と言って出たり入ったりして遊んでいたようです。

そんなことがきっかけになって、大道芸などを中心とした「アート・タウン」というイベントで食事の休憩所で使えないとか、常総市のワールド・フェスティバルにゲルを持ってきてモ

ンゴル料理のお店やらないとか、また7月11日には「ゆかりの森」で「ナーダム」というモンゴルのお祭りをやることになったり、急にバタバタとイベントが決まって、「ゲルは大人気」になりました。

さて皆さん、現在つくば市にモンゴル人は何人ぐらい住んでいると思われますか？答えは、学生さんが30人、家族を含めると大体60人ほどが住んでいらっしゃいます。7月の「ゆかりの森」のイベントではおそらく30～40人のモンゴル人がいろいろと手伝ってくださる予定です。

今回は皆さんの好意と偶然とが良い方向に重なって問題を解決することができましたし、また多くのつくば市民とモンゴル人が知り合うきっかけにもなりました。こうしたことが新しいコミュニティにつながればいいですね。「ゆかりの森」の方が「ゲル村を作って村長をやろうかな」と言っていました、それもいいことだと思います。

以上、つくば市国際交流協会からの報告でした。

## 第2部 総合討論～市民協働による地域プロデュース～

### (1) ビデオメッセージ

#### 市民レポーターへの期待 ～平常時と災害時～

中川和之さん

(時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長)

**市民レポーターA:** われわれ市民レポーターは町内で有名な人とか、おいしいお店の食堂のマスターだとか、を取材することになると思うのですが、そういうときには突っ込んで、その人を通して、他のものが見えるような取材をすればいいのでしょうか。

**中川:** 人に着目するのはいい手だとは思いますが、ただ、その方がどんな材料を持っているのかというのは、ちゃんと調べていかないと、何を聞いていいかわからないですよ。

**市民レポーターB:** どういう時に、これはおもしろいとか、「おっ、これは」というような話が聞けるものでしょうか。

**中川:** この人はこんな材料を持っているからこういうことを聞いてみようとか、こう思っているだろうからそこを聞いてみようといった予定したクエスションがありますよね。ただ、想定したことだけを聞くのではおもしろくはない。おもしろい話を聞きたいときには相手にも少し時間を取っていただい

て、その場でその人の話を聞きながら考えた質問のほうが、よい結果がでると思います。

**市民レポーターC:** 今まで思いつくままブログを書いていたのですが、市民レポーターという名前がついたら、やっぱりおもしろくなければいけないのではないかと思っています。どこから取りかかったらいいのでしょうか。

**中川:** 調べることで自分が何かを発見すれば、おもしろいことが出てくるでしょう。何もしないでいたら何も書けない。何か行動することで自分なりの「発見」があるはずですよ。そして、自分が発見したことがどうおもしろいかということ、少し丁寧に伝えたり書いたりすることで、おそらく見てくれた人も共感してくれるのではないのでしょうか。日記のように自分を読み手として書くような文章だと、わかっているから途中のプロセスは飛ばしてもいいわけです。それはそれで表現が文学的であったりするかもしれませんが、でも、レポートするならば、客観的な部分をもったほうがいい。どうおもしろいか、ファクトでつなげて伝えていく方法もあります。具体的な材料から何を捕まえて表現するかは自分のセンスですから、いろいろな材料の中から選択すればいいと思います。



つくば市民レポーター WEB サイト

**市民レポーターD:** レポートするとき、これだけは絶対やってはいけないというのはどういうことでしょうか。

**中川:** われわれマスコミが誰を取材しているかという、ほとんどの対象が行政です。企業などを取材することはありますが、例えば事件を扱っている警察組織も行政です。行政となると、良いことをやっても当たり前という前提です。だから、何か少しでも良くないことがあるとそれが即ニュースになってしまう。でも、実は世の中、そんなにいい話って多くないですよ。市民レポーターには、良いことを伝え、地域のプラスや魅力を引き出してほしいですね。もちろん改善すべきところとか、問題点も出さなければいけないときもあると思いますが、それならばどうすれば良くなるのかといった、前向きな形で伝えてほしいですね。

地域の問題はみんなで考えていかな

ければならないわけで、問題点を探しだしたのであれば、その解決の手がかりも一緒に探していただきたいです。レポートを見た人が、元気になって、この地域のことをもっと大事に思えるのではないのでしょうか。

**市民レポーターE:** 市民レポーターは、良い面をたくさん発信したほうが良い、ということですね。ほめるというのは難しいと思いますが、そういう訓練とかやり方はあるのでしょうか？

**中川:** 人が伝えたいことを丁寧に聞いていくと、結果的にはそれがそういうところにつながると思います。ただ気をつけなければいけないのは、話を聞く相手側が、思い込みとかで一方的で客観的と思えないことを話される可能性もあります。そのためにも、さまざまなことの知識が必要ですし、背景的な材料を事前に調べておくといいですね。聞いた話をそのまま裏付けをとら

ずに出してしまったのでは、取材した人も一緒になって「それが事実だ」と伝えたことになりかねません。どこまで裏を取るかというところは難しいですが、ちょっとおかしいと思うことがあったら、まず調べることでいいですね。ネットで調べたり、別の人に追加取材をしたり、コメントをしてもらって。インタビューにしても、どの部分を使うのかを考える必要があります。「言い過ぎかな」と思われるところは、少し避けるといった配慮も必要ですね。

取材される側はプロではないですから、裏付けまで考えずに話されます。本人にはそのつもりがまったくなくても、事実でないことを言うてしまう可能性があります。そこは逆に配慮してあげて、丁寧に調べる。思いが過剰になってしまう方もいるかもしれませんが、そういうことをふまえて、話を引き出してあげれば、皆さんも元気が出てくるし、地域は豊かになると思います。

**市民レポーターF:** 記事にまとめるときに、どういうところをうまく取ってつなげていくのか、といったあたりのコツはあるのでしょうか。

**中川:** 見出しをどこから取ってくるかを考えると、見えてくると思います。たくさん話をしていただいたとすると、おそらくはいくつかの話の塊があるはず。その塊の一つずつに見出しをつけてみる。そうすると、何か見えてくるものがあるはずですね。

**市民レポーターG:** つくばで、市民レ

ポーターという取り組みをやるという話を聞かれたときに、最初に思い浮かべたことは何ですか。

**中川:** どの地域でも、PTA などのつながりもあって女性の地域参画は進んでいますが、仕事中心の人が多い男性の地域参画はなかなか進んでいませんよね。つくばは新しい町ですからそういう壁は少ないと思いますが、古くからある地域ですと、町内会などの活動に新しく参画したくてもなかなか入る余地がない。

一方で NPO やボランティア組織があっても、その人たちは自分たちでまとまっているところがあって、新しい人が入りにくい。いきなり「手伝います」と言われても、誰だかわからない人だと引いちゃいますよね。

特に今、団塊の世代で地域で活動してみたい、地域デビューしたいと思っている方はたくさんいるわけですが、デビューする機会がなかなかないですね。

そのときの入って行き方として、「市民レポーターですが、話を聞かせてください」「皆さんがやっていることを取材させてください」という入り方ができるんじゃないかな。そういう方法なら、無理なくその方の居場所が見つかるかもしれないと思っています。市民レポーターの仕組みづくりが、地域参画への第一歩になることを願っています。

あまり大仰でなく、肩肘張らずに伝えていけるし、自分の好奇心で入って

いけばいい。もし、そういうメディアになっていけば、自然と人や情報が集まりますし、そしてそこから何かが生まれるのではないのでしょうか。

**市民レポーターH**：災害をレポートしてマスに発信することは、プラスとマイナスの常にもろ刃の部分を持つと思います。どのあたりを線引きとして考えればいいのでしょうか。

**中川**：実は、神戸の地震の前まで、災害情報を議論する場で、「大事なのは『引いた画だ』』と言っていました。災害時には、カメラがつい派手なところを写しに行く。そうすると、視聴者に

周辺全部がひどい状態だと思わせてしまう。直前にあった三陸はるか沖地震の時に、八戸でパチンコ屋が一軒つぶれて、運悪くお亡くなりになった方がおいででした。その一軒がつぶれただけで、周りは何もないのです。でも、そこだけ撮ると大変な地震が起きたように見えるんですね。

しかし、神戸の地震の現場に行ったときには、これは引いた画どころではないと思いましたね。要するに、360度、どこを見ても壊れているわけですから。

大マスコミや大メディアは、極端な

所しかとらえない手口は、最近皆さんもよく分かっておられる。だから、阪神大震災の映像を見ても、360度、どこを見渡してもめちゃくちゃだということが、かえって伝えられなかったんですね。これは教訓でした。

ただ、皆さんが、自分たちが暮らしている地域のいろいろな部分を、地元でこだわってみるときに、引いた目を持ちながら目の前に見えているモノやコトをとらえることができれば、そんなに間違えずに情報を伝えることができるでしょう。これって、どういうことかなと冷静に考える心の目があれば。

何かを伝えようとするならば、事前に調べて自分の頭の中でシミュレーションしておくといと思いますね。取材をした際に、目の前に見えていることがすべてだ、という考え方になってしまわないように気をつけたいと思います。

**市民レポーターG**：日大芸術学部に行って、ロック青年をやっていた中川さんが、なぜ記者になろうと思われたのでしょうか。

**中川**：私たちの世代はやはり、ベトナム戦争があったり、公害の問題があったり、さまざまな社会の問題があったんですが、先輩たち団塊の世代は、学園紛争などで真正面から社会にぶつかって玉砕したんですね。あとに続く世代の私が、どうやって生きていこうかということを考えたときに、最初はまともに就職して社会に出ていくこと

についてポジティブにはなれなかったですね。それで音楽に逃げていたところもあります。

たまたま成り行きで今の会社の就職試験に受かってしまい、記者になってしまいました。ただ社会に対する問題意識というと偉そうですが、そういう問題意識から逃げる場所として音楽をやっていたとも言えるので、社会問題に対する意識があるという背景事情は共通していると思っています。

今でも心はミュージシャン、というところがあって、ザックの中にはマウスハーブが入っていたりします。今は、音楽の場に逃げ込まなくても大丈夫になりましたが、音楽を楽しんでできるような時間がほしいですね。

**市民レポーターG**：今日はどうもありがとうございました。



つくば市民レポーター WEB サイトに投稿されたブログ (http://reporter.e298.jp/)

## (2) 話題提供 「地域ドラマをつくろう！」 ～地域の見える化と プロデュース～

長坂俊成さん  
(防災科学技術研究所  
主任研究員)



皆さん、こんにちは。今日は盛りだくさんの内容で、どうやってそれぞれのつながりを解釈しようかと悩んでいらっしゃるかもしれませんが、おそらくこの後のディスカッションで少しは解き明かされるだろうと思っています。

さて、お手元にお配りした小冊子ですが、これは「地域発・防災ラジオドラマを作ませんか」という呼びかけのパンフレットです。地域の防災力とは何か。私たちは、日頃の地域の力がいざ災害が起きたときの地域の潜在力になると考えています。しかし地域の潜在力と防災力とが、災害が起きた時に必ずマッチングするのかということ、そうでもないということもこれまでの研究で少しずつわかってきました。そして防災を目的とした活動と、防災を目的としない日頃のさまざまな地域活動や市民活動を、平常時に結び付けておくことが必要なのではないか、と考えるに至りました。

そのひとつの方法として、住民の

方々が自ら地域のドラマをつくるというアプローチを提案しています。詳細はこのパンフレットをぜひ読んでいただきたいのですが、簡単に流れをご説明しますと、まずは住民の方々が集まって、地域で起こる災害とその課題についてディスカッションしていただきます。次にそのディスカッションの結果を素材にして、ラジオドラマの台本を作っていきます。作る過程で、行政としてはどう考えているのか、民生委員さんはどう考えているのか、あるいは商店街の店主はどう考えているのかなどをそれぞれがディスカッションし、また防災についてあまり考えていないという方々にも参加していただくことで、これまでの防災訓練ではなかなか出てこないような部分についても意見を出し合っていきます。そして台本にいろいろな修正が入ります。この修正がとても大事なのです。

専門用語になりますが、私たちはこれを「リスクコミュニケーション」と呼んでいます。つまり、地域で起こりうるリスクを、皆さんそれぞれが描いてイメージをふくらませ、それを共有して対策を考えていこうというものです。これを今、全国のさまざまな地域に広めたいと考えています。防災となりますと、例えば町内会や避難所運営組織、あるいは町内会単位の自主防災組織の方々などが対象となりますが、自主防災活動が活発なところはいろいろ取り組みが目白押しで、時間がないというケースもあります。そこで私た

ちは、現在防災活動をしていない、中学校や高校の放送部の方やPTA、あるいは市民サークルやスポーツ少年団の方々も交えて、地域と一緒にドラマを作っていこうという取り組みを進めています。

ディスカッションの過程で、自主防災組織の方から「うちの地域の自主防災組織ってどうなっているのか」、とか、「どんな機材が防災倉庫の中に入っているのか」、「予算が無くて発電機が1台しか入っていない」という話が出ると、スポーツ少年団やボーイスカウトのお父さんたちが、「この近所では、うちのスポーツ少年団とボーイスカウトで、キャンプ用の発電機が5台はありますよ」といった情報が出てきて、会話が弾む。つまりこうした情報が共有できれば、防災倉庫には入っていない社会資源を、災害時の防災資源としてうまく活用していくことができます。そしてその社会資源を活用できるような日頃の関係作りがとても大事なのです。これが地域発の住民参加による地域のドラマ作りを通して、地域の課題解決能力を高めていこうという提案です。

そうは言ってもどんな災害に備えておくのかということについては、きちんとした科学的な知見を抑えておかなければなりませんので、地域で活用していただけるようなコンピュータのシステムを開発し、それを提供しています。NIEDで提供しているハザードマップや、被害想定マップなどを、例えば

避難所単位で住民の方々が使えようような環境整備も進めています。

さて地域発のドラマ作りについて、その実例をご紹介します。

神奈川県藤沢市鶴沼中学校の避難所を共用する、町内会の方、地域のマンションの管理組合の方々が集まって、1日かけて、実際に地震が起きた時に、地域で、または避難所で起こることについて、議論します。手法としてはロールプレイングといって、各人がそれぞれに役割を演じることで、地域の役割を浮き彫りにしていく。例えば町内会の方が校長先生になったり、校長先生が役所の防災担当になったり、町内会長になったりと、役割をグルグル回していきます。

その議論の結果を素材にして、台本をつくります。その台本に基づいて、今度は高校生や主婦、町内会長さんなどいろいろな方がコミュニティFM局のスタジオに集まって、みんなで収録を行います。練習は1回だけで、あとは本番勝負です。台本の制作と演技指導は、地元で劇団などをやっていらっしゃる方にお願ひしました。大体1回の放送で15分程度のドラマになります。また効果音やBGM 含め著作権はすべてクリアしています。これを地元のコミュニティFM「レディオ湘南」で8回にわたって放送しました。

さて今つくばでは、先ほど河原井さんからもご紹介ありましたが、福祉の地域ケアについて、ネットワークの関係を可視化していこうという話を進



めには、そのハブを活用して下さる人脈や情報が必要です。今回の市民レポーター編集会議は、ハブとしての「ラヂオつくば」に情報を入れてくださる、あるいは人を紹介して下さるひとつのルートである、と解釈しています。そして、先ほど皆様からいただいたアンケートも私たちのハブの情報のひとつにさせていただきたいと思っています。

今日はさまざまな市民の動きを発表していただきました。ご来場の方々もかなり広範囲な地域からお越しいただいているようで、課題になっているつくば市の周辺地区と中心地区の方が、まんべんなくおられます。それもふまえて、今日突然お願いした今井さんと飯田さんには、中心地区と周辺地区のそれぞれ代表ということでご登壇いただきましたので、よろしく願いいたします。先ほど田辺さんが発表された山口小学校は、飯田さんがお住まいになっている神郡地区のお隣ですよ。

**飯田：**そうですね。私が住んでいるところから車で5分くらいのところですよ。



**増田：**アンケートを拝見しますと、中心地区の方が、山口小学校のことを初めて知ったということですが、神郡地区も似たような感じでしょうか。

**飯田：**そっくりです。

**増田：**この時期は、ホテルがたくさん見られますね。

**飯田：**そうですね。最近農業の事情が変わりまして、農薬も少なくなりましたので、だいぶ見られるようになります。東京や近県からも見に来られる方がいらっしやいますよ。

**増田：**皆さん、実はつくば市では、車で7~8分も行けばホテルが見られるんですよ。今日そのことを知った方もだいぶいらっしやと思います。人が集まるところで得られる情報はけっこうありますが、そのひとつとして市民レポーター会議やラヂオつくばも生かされると思います。

今井さんのお宅は中心地の千現1丁目でしたね。千現地区の学校は、どちらかというとマンモス校ではないですか。

**今井：**そうですね。地区内には竹園東小学校、竹園東中学校があります。

**増田：**いわゆるアカデミックな地域のど真ん中になるわけですが、今度、起震車を持ってきて皆さんに体験していただくという企画があるそうですね。

**今井：**昨年、千現1丁目の区長をしているのですが、昨年は消防署と相談して、煙テントの体験と消火器の操作訓練を行いました。今年は、茨城県

に1台しかないという起震車を呼んで皆さんに地震を体験してもらおうということになりました。市にも相談したところ、「そういうことならば非常食をプレゼントしましょう」ということで約150人分を提供していただくことになりました。

**増田：**実は、「ラヂオつくば」でも、もう2週間くらい前から「千現に起震車が来る」という情報を放送していますが、今日初めて知ったという方もいらっしやと思います。千現の方でなくても体験することは可能なのでしょうか。

**今井：**はい、大丈夫です。皆さんもぜひお越しください。



**増田：**起震車の体験はなかなかできませんから、地域の方が盛り上げようとしている情報が分かればそれを見に行ったり、参加した人にレポートしてもらおうといったことができると思いますね。

**永井：**つくば市民ネットワークの事務所が千現の1丁目にあります。実はこの地域に、つくばエクスプレスの開

通に伴って14階建てのマンションの建設計画が持ち上がりました。町内で大変だということになって、自治会ではなくて有志の方たちが一人二人と加わって、大きな動きになり、結局は高さ制限がかけられて6階建てのマンションに落ち着きました。その際に知り合ったのが、今井さんでした。こうした一連の動きもあって、町内がすくまとなり、ますます1丁目が元気になっているという感じです。

**増田：**さて、長坂さんは研究で日本中を飛び回られていて、いろいろな地域のことをよくご存じなのですが、実際は吾妻の住民で、つくば市民でもあります。つくば市の協働のガイドラインの策定委員もなさっていましたが、つくばについていろいろ考えていらっしやることがあると思うのですが、いかがですか。

**長坂：**仕事でいろいろな地域に行って「地域の参加や協働はこうあるべきだ」と偉そうなことを言っていますが、正直、自分の住んでいる地域での実践は十分とはいえません。自治会はあるのですが、その活動はゴミ置き場の清掃当番と回覧板を回すぐらいです。うちの自治会は公務員宿舎の管理組合の性格を有していますので、下水管の清掃や植栽の手入れがあり、それ以外、ほとんどつながりはありません。自治会で防犯の自警団を作ろうという提案がありまして、私も賛成したのですが、「任意のグループとしてやられたらどうですか」というわけで、希望者の方

が隣の自治会の方々と一緒に防犯自警団の活動をするようになりました。

自治会や町内会などの地区の住民の自治的な活動と、個別の地域の課題を解決していくという市民活動がうまく結び付かないというのが、今私が住んでいる地区の事情です。防犯自警団で私の担当は第2、第4水曜日で、夜9時半から1時間程度町内を回りますが、出張があるとなかなかできません。出席率が悪く申し訳ないと思いつつも、自警団の懇親会に出席したら、たまたま小学校の役員の方々が出席されていて、PTAも自治会とは連携がないのですが、自警団とは防災に関わる情報交換していきましようということになり、できることから少しずつでも地域とのネットワークづくりを進められればと思っています。

**増田：**ありがとうございます。意外と地元の会合などに出られないというのは、実は私もそうで、防災関係の仕事を一生懸命やっていたら、地元の消防団への出席率が悪くてクビになったという経歴があります。私の住まいは下妻なのですが、「つくばのことばかりやっていて、下妻のことを何もやっていない」とよく友人にも言われます。痛し痒し、ですね。子どもたちは地元の下妻でお世話になっているわけですが、自分はつくばでもお世話になっている。

つくばの研究学園都市にお住まいの方はご主人が単身赴任だったり、あるいは東京に通勤されていたりで、意外

と地域にふれていないところがあると思います。かかわりかたのひとつとして、市民レポーターの活動に参加していただくのもよいかと思います。

**長坂：**今日は市民レポーター編集会議のシンポジウムなので、ぜひ会場にいらしている市民レポーターの方にも発言していただきたいですね。先ほどのビデオメッセージの際に質問された方が、今日いらしています。中川さんとのやりとりは40分ほどあったのですが、私のほうで勝手に編集しましたが、私のほうで勝手に編集しましたが、ぜひ感想を聞かせていただきたいのですが。

**市民レポーター：**ご指名がありましたので一言。私が質問したところはほぼすべて取り上げていただいたので、編集については良かったと思っています。

ただ内容について言えば、中川さんはまさにプロで、しかも時事通信社という看板を背負って取材をされています。その部分は市民レポーターとしての取材とは違いがあるのではないかと。そこをどうすればいいのか、ということについてはあれからずっと考えています。

ひとつには「つくば市民レポーター」の認知度を上げるということ。そうしないと取材に行っても「何それ？」となって、それを説明するだけで四苦八苦してしまうところが容易に想像できるので。

**増田：**ありがとうございます。つくばにはeコミュニティつくばの実証実験

があり、そこにはNPOや市民グループが参加されているのですが、この実験のスタートからかかわっていらっしゃる鶴岡さんにもお話を伺いたしたいと思います。

**鶴岡：**私どもは、「ほにゃらキッズ」という障害児の子供たちのグループで、eコミュニティつくばに参加しています。私の息子は脳性麻痺で、車いすでつくば市内を動き回っているような状態です。今回は市民レポーターに興味があったのでこのシンポジウムに参加していますが、いざ市民レポーターになったらどのように情報発信をしていけばいいのかについては非常に悩みますね。

eコミュニティつくばでは、子供たちの活動や感じたことを掲載していますが、市民レポーターという立場は、自分自身の中でまだじっくり来ないところがあります。しかし個々で活動するだけでなく、やはりつながることによってさまざまな広がり生まれることをこの数年間実感しておりますので、eコミュニティつくばも市民レポーターも参加していきたいなと思っています。

**増田：**鶴岡さんのグループは、先ほどの河原井さんの発表にあった、災害ボランティアセンターの設置訓練の時も災害レポーターとして協力いただきました。こういう協力の仕方もあるんだと、お互いに結構目から鱗でしたね、あのときは。障害を持った方は優先的に場所を提供されるので、その余

裕がある分レポートしてみようという発想で、素晴らしいことだと思います。

さらに地区住民として、2回の訓練に携わっていらっしゃる小野さんはいかがですか。

**小野：**私は以前大曾根小学校でPTA会長をしております、そのときに小学校周辺にある危険情報をハザードマップにしようという取り組みを行いました。当時子どもたちが下校時に痛ましい事件に遭ったりしたことが続いたので、地域の最優先課題として、ネット上でも見られるように整備しました。

今は立場が変わりまして、大穂地区の小学校、中学校であいさつ運動に取り組んでいます。あいさつは基本的なことですが、地域の中で何が不足しているのかを考えた時に、実はそういう基本的な部分ではないのかということで、小中学校の先生方も巻き込んで行っています。

各地域で何が一番のキーワードになるのかということに敏感にアンテナを張ることが、情報発信する際に大切なのではないでしょうか。市民レポーターの活動もしかりだと思います。自分のフィールドが無いとなかなか発信もできません。自分のフィールドは何かを考え、置かれている立場を大事にすることも必要ではないでしょうか。

**増田：**大曾根小学校でPTA会長、今は大穂中学校のPTA会長をされて、学校区を中心にいろいろ活動されている小野さんでした。

さて皆さんからのアンケートで、各学校の内容を紹介する番組を「ラヂオつくば」でやったらどうかという意見をたくさんいただきました。今回のシンポジウムのチラシを火曜日と水曜日に、51校全部に配布しに行ったのですが、その際に、ぜひ学校の紹介をやらせてくださいと校長先生にお願いしてきました。併せて各学校の校歌を知りたいので、音源の有無、有れば提供していただけるかどうかなど、いくつかの項目を盛り込んだヒアリングシートをお渡しし、それを回収している最中です。ぜひ放送してみなさんに聴いていただきたいと思います。

それから、今日はスペシャルゲストとして、新潟県柏崎市北条地区から戸田さんと江尻さんにお越しいただきました。新潟中越地震で大きな被害を受けた地域ですが、北条地区でも市民レポーターが検討されていると伺いました。今日のシンポジウムをお聞きになった感想などを聞かせていただけますでしょうか。

**江尻：**新潟県柏崎の北条からまいりました江尻と申します。つくば市の皆さんが防災活動に対しまして一生懸命取り組んでおられることに、まずは敬意を表したいと思っております。また新潟での二度の地震の際には、つくば市からさまざまなお支援、ご指導をいただき、私たち住民が助けていただきましたことに対して、感謝し御礼を申し上げます。今日もまた非常に有意義な事例報告を伺って、大変勉強になりました。



した。

今日のこの機会に、私たちの二度の経験談をぜひお話したいと思います。北条で経験した地震は大会の地震とはかけ離れていますが、まず地震が発生したら、自分のことは自分でやる、ということが基本です。行政の方には失礼かもしれませんが、大体2日間は行政は動きません。3日目になりますと行政が動き始めて、救援物資がどんどん運ばれてきますが、その間は自分たちで炊き出しやお年寄りの世話をしなければなりません。

次に要援護者の安否確認ですが、これは台帳が無ければできません。私どもは各町内会長に協力してもらい、要援護者台帳をつくり、市の防災課とわれわれコミュニティの防災本部に1部ずつ、さらに各町内には町内だけの台帳を整備しています。これにはプライバシーの問題もありまして、「私は要介護だけれども、名前を出すのはいやだ」という方もおられました。プライバシーと人命、次元が違うといわれる方もいらっしゃるかもしれませんが、

しかしいざ地震に遭遇しますとプライバシーなどと言ってもらえません。助けてもらいたいというのが本音です。特に要介護の方で介護度が3~5になりますと動けない方がほとんどです。そのためにも台帳を整備する。そして機密事項として厳重に管理することが必要です。

それから向こう三軒両隣という言葉がありますが、普段のお付き合いが大切です。地震が起きた時に、隣近所がどういう状況、環境にあるかを把握するためにも、私たちは緊急連絡先をつくっています。実際に関西や関東方面のご親戚から「家にいるはずで、電話は鳴っているけれど全然出ないがどうなったのか」といった電話が来ることもありました。その際に「〇〇さんは無事で避難所にいますよ」とか、あるいはまた「怪我をされて△△病院に入院しています」といった情報をお伝え

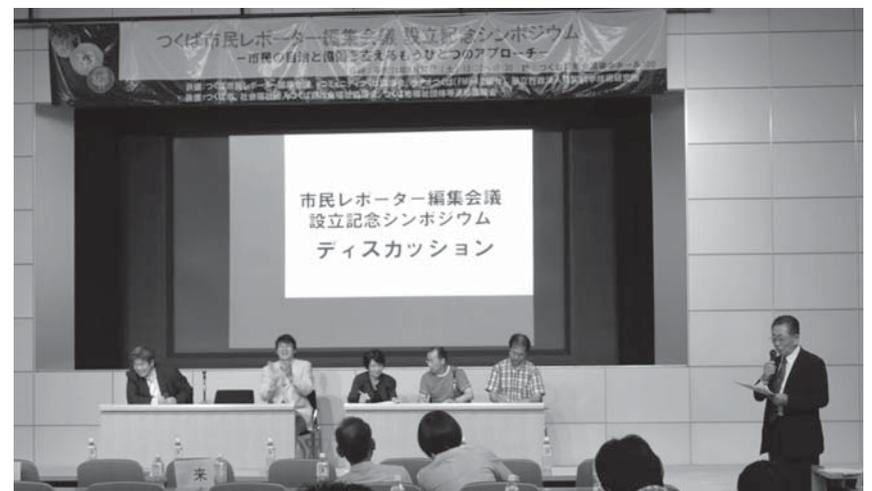
することができます。

さらには、防災マニュアルは簡単簡潔が一番です。防災マニュアルを見なければ動けないようではいけません。「頭に入れた防災」で結構なのです。本日は学校のPTAの関係者もおられるようですが、学校にいる間に地震が起きたら生徒はどこに逃げるのか。学校では教室から運動場、屋外に出るというマニュアルがありますが、そこから家庭まで誘導するマニュアルはありません。

また昼間の被災では共稼ぎで両親がいない家庭もあります。子どもが無事に家に帰れるマニュアルを作ることも大切です。

またペットの問題もあります。避難所へのペットの持ち込みは禁止ですが、これを徹底することがのちのトラブルを防ぐことになります。

避難所の耐震性の調査も必ずお願い



いたします。われわれのときは調査をしていなくて、電気が落ちたりして別の教室に移動したということもありました。

仮設トイレも必須です。中越地震の際、夜コミュニティに3カ所の仮設トイレを設営したのですが、朝にはトイレトーパーで真っ白になっていました。それを戸田さんがバケツとスコップを持って拾い集めました。土に穴を掘って2枚ほど板を渡してあとはブルーシートをまわせば仮設トイレになります。そんなことも参考にさせていただきたいと思います。また暑さ寒さ対策も大切です。

それからみなさん、いざ地震が起きたら何を持って逃げますか？医薬品や電池、携帯ラジオなどいろいろありますが、町中が全滅するようなことはめったにありませんから、まずは「現金」を持って逃げることです。それからFMピッカラさんからは地域の細かな情報が入ってきましたのでこれは助かりました。

まずは地域の行事にできるだけ参加されて、地域の皆さんが仲良くなれば、防災組織も早くできます。皆さんと一緒に防災組織を立ち上げて、災害に対する備えをしていただきたいと思います。

**増田：**どうもありがとうございました。つくば市にも読み方は違いますが「北条（ほうじょう）」という地区があります。偶然なのですが、新潟中越地震の際には、社会福祉協議会の河原井さ

んと一緒に柏崎の北条地区に入りました。そのときに、おばあちゃんが一人、お弁当をもらいに来たのですが、「もう一個もらっていいかな」という話をされるのです。「もう一人いらっしゃるんですか」と聞いたら、「おらがうちのもっと裏の山のほうのうちに、おらよりも年寄りのおばあちゃんがいる」と。「家から歩いて来られないから、私が持って行きたい」という話をされ、ジーンとききました。茨城レスキューバイクの田辺隊長も、われわれと別ルートですが北条に物資を運んでいます。

**田辺：**5～6回行きましたね。

**増田：**何か運命的なものを感じますので、こちらの市民レポーターともよろしくお付き合いいただければと思います。

**永井：**今日は市民レポーターでもあり防災士でもある長倉さんが来てくださっていますが、いまつくば市には6人の防災士の方がいらっしゃるのですが、お顔も名前もわかりません。今度の防災訓練のときには参加していただきたいと思います。江尻さんのお話にもありましたが、彼女が私たちに教えてくれたのは、一番困るのは学校から帰宅する子どもたちのためのマニュアルが無い、ということでした。つくば市の地域防災計画の分厚い資料を見ましたが、そういう部分はありませんでした。おそらくは、それぞれの地域や学校の校長先生などに任されているのだと思いますが、平常時からのやりとりを含め、親としてもあまり考え

ていませんでした。



それからトイレの問題についても、簡易トイレでいいので、壊れていなければマンホールのふたを開けてその上に設置すればいいそうです。

今江尻さんのお話を伺っていて一致しているなど思いましたので、ぜひいろいろと参考にさせていただきたいと思います。

**増田：**ありがとうございました。さて、所定の時間になってしまいましたが、今日は会場にさまざまな立場の方がいらっしゃっているので、この機会に発言していただきたいと思います。いかがでしょうか。

**会場A：**私は竹園に住んでいて、JAXA（宇宙航空研究開発機構）で人工衛星の仕事をしております。昨年2月に「きずな（WINDS）」という超高速インターネット衛星を打ち上げましたが、その防災利用という観点で、茨城レスキューサポート・バイクの田辺さん、神奈川のレスキューサポート隊やNPO愛知ネットの方々と防災訓練を行いました。田辺さんからのご紹介で長坂先

生とも知り合うことができましたので、何か一緒に取り組みができないかと思っています。

**増田：**「きずな（WINDS）」から、七夕のときにメールを送ってくれるというサービスがあるそうですが。

**会場A：**「きずな（WINDS）」は、地上から高度3万6000キロメートルのところにあります。昨年はクリスマスメールのサービスを行いました。今回は実験のコンフィギュレーション、構成を変えて7月7日に七夕メールとして皆さんにお届けする「宇宙からきずなメールを」という企画を立てました。WEBサイトから手続きができますので、皆さんもぜひアクセスしてみてください。

**増田：**ありがとうございました。茨城県社会福祉協議会の小林さんがお見えですが、いかがでしょうか。

**小林：**私ども茨城県社会福祉協議会でも災害時の支援活動を積極的に行おうとする17団体で茨城県防災ボランティアネットワークを構成しています。先日の世話人会の中で今年度の事業計画について話し合ったのですが、その際にIRBの田辺さんがいらして、このシンポジウムの話を伺い、参加させていただきました。私どもの事業も県内の多くの方にご協力をいただいています。今日は防災研の長坂さんとも知り合うことができましたので、是非、私ども、社会福祉協議会とも一緒に仕事をさせていただけないかと思っています。

長坂さんのお話にもありましたが“防災力と地域のさまざまな力を結びつけた活動”は、私ども社会福祉協議会が目指していることであり、非常にうれしいですね。引き続きこういう機会がありましたら、参加させていただきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

**増田：**ありがとうございます。皆さんいろいろな思いで人に何かを伝えていこうと活動されていますから、どこかでつながるんですね。私もラジオ局を立ち上げてそのことを実感しています。

アンケートの中に、中心地区と周辺地区の小学校の隔たりが大きいというご意見がありました。実は、つくば市は合併した年には、小・中学校合わせて53校ありましたが、今日までの20年間で2校が廃校になっています。ひとつは筑波第一小学校で、つくば市で最も標高の高い小学校でした。今でも校舎が残ってしまっていて、地域の公民館や通信制の学校の校舎として使われています。そのこのプールは素晴らしいですよ。学校で一番高い所にプールがありまして、そこから眼下につくば市を見下ろすことができます。日本で一番素晴らしい小学校のプールだと思うのですが、もうひとつが廃校になってしまいました。もうひとつが大形小学校で、つい最近廃校になったばかりです。

つくば市議会で決定された策定ラインによれば、各学年にクラス設けら

れない所は運営が難しいそうです。閉校が検討・協議されている学校が実はまだたくさんありますので、今のうちに記録しておかなければ、その地域の文化といったものも無くなってしまいかもかもしれません。

いまお話した廃校になった2校の小学校は、今でも地域の避難所です。しかしもう校長先生おりませんので、いざ何かが起きた時に、誰が学校を開けるのか、避難所を運営していくのか。地域の人たち自身が自ら考えなければ、誰も心配してくれないでしょう。行政だけを頼るのではなく、また批判するのではなく、みんなで考えて何とかしていこうということが、今日お集まりいただいた皆さんの本意だと思っています。

さて、いただいたアンケートには、つくば100選の紹介ミッションについてのアイデアもたくさんいただきました。これらの結果を市民レポーター編集会議の皆さんにも参加してもらい、具体化のための検討をしていただく。われわれはその情報からラジオで流せるもの、皆さんにお知らせしなければならぬことをピックアップして生かしていきたい。またNIEDにはそれぞれの動きを見ながら合いの手を入れていただきたいと思っています。それでは最後に、長坂さんからひと言締め挨拶をおねがいたします。

閉会挨拶

**長坂：**今日は防災の話がだいぶ多くなってしまいましたが、私としては、防災以外の人と人とのつながりや、地域のいろいろな景色が見えればということをお待ちしておりました。



今後、月に一度、市民レポーター編集会議をセンター地区で開催する予定です。また市民レポーター養成講座も併せて開催していきたいと思っておりますので、ぜひ皆さんもご参加ください。

また本日は、遠路はるばる新潟県柏崎市北条地区からもお越しいただきました。先ほどの江尻さんのお話にも登場しました戸田さんという素敵な女性がいらっしやいます。戸田さんのおやりになっていることが、まさに地域プロデューサーではないかと思っております。この話につきましては、私自身が市民レポーターとなって、つくばの「中」のことだけではなく、つくばに役立つ「外」のさまざまな情報としてご紹介できればと考えております。

最後にこのシンポジウムについて、

準備段階から尽力いただき、また本日のコーディネーターを務めていただいた増田さん、ご報告いただいた発表者の方々、そしてディスカッションに登壇いただきました皆様にも改めて御礼申し上げます。

そして会場の皆さん、本日はどうもありがとうございました。

**つくば市民レポーター編集会議  
設立記念シンポジウム開催のお知らせ**

独立行政法人防災科学技術研究所が2009年3月に開催した市民レポーター養成講座に参加した市民が中心となり、4月29日に「つくば市民レポーター編集会議」が発足しました。  
つくば市民レポーター編集会議は、市民ひとりひとり、生活者のひとりひとりの多様な視点から、つくば地域の課題や魅力を発見し、それをeコミュニティつくばやラヂオつくばなどの地域メディアに発信し、つくば地域の課題解決の力に貢献することを目的とする市民ボランティアグループです。  
この度、つくば市民レポーター編集会議の設立記念として、つくば市民レポーター養成講座、eコミュニティつくば編集局(地域eコミュニティサイト)、ラヂオつくば(eコミュニティFM局)、独立行政法人防災科学技術研究所との協働に基づき、設立記念シンポジウムを開催します。

日時：平成21年6月27日(土) 13時30分～16時30分  
場所：つくば国際会議場 中ホール300 (茨城県つくば市竹園2-20-3)  
テーマ：市民レポーターが地域を編集する  
～市民の自治と発展を支えるもうひとつのアプローチ～

定員：200名(事前申し込み制、先着順受付)  
参加対象：一般市民、市民レポーターに関心のある市民活動団体、企業、行政のみなさま  
参加費：無料  
共催：つくば市民レポーター編集会議、eコミュニティつくば協議会、ラヂオつくば、独立行政法人防災科学技術研究所  
後援：つくば市、社会福祉法人つくば社会福祉協議会、つくば市福祉団体等連絡協議会

■ 参加登録は以下のホームページまたはFAXからお願いします。  
http://bosai-drip.jp/form/ymxp\_form/ymppo\_form.htm  
FAX:029-863-7541 (氏名、住所、電話番号またはメールアドレスを記載ください)

■ 市民レポーター編集会議のホームページ: http://reporter.a29.jp/  
同シンポジウムでは、取材や編集活動を通じてさまざまな分野の活動や人、地域課題を中心としたストーリー、地域課題を解決するための新たな市民協働のデザインを共有、つくば地域の魅力を高める地域デザインの方法、知恵、知恵を市民レポーターが市民協働の活動などについて、市民レポーターのみなさんと共有される増加の方向性を考えていきたいと思います。

■ お問い合わせ先：シンポジウム事務局  
独立行政法人防災科学技術研究所 長坂、村上 TEL:029-863-7546  
メールアドレス: kns@bosai.go.jp

## 2. つくば市民レポーター編集会議について

### 市民レポーター編集会議発足の経緯とこれまでの取り組み

つくば市民レポーターとは、「つくば地域の身近な生活情報やイベント、市民活動などの情報を市民自らがレポートし、またつくばに災害が発生した場合には、市民災害レポーターとして地域の被災情報や被災生活に必要な生活情報を提供する」という目的と使命を担っています。また情報交換や取材を通して市民レポーターがそのネットワークを広げていくことで、地域における市民協働をプロデュースする役割も併せ持っています。

NIEDはこうした市民レポーターの養成を目指し、2009年3月、コミュニティFM放送局のラヂオつくばと共同で、市民レポーター養成講座を開催しました。講座は、日常の取材活動や記事作成、投稿方法や、災害時の情報収集や情報発信に関する基礎的な知識と技術を身に付けることを目的に全4回行いました。

市民レポーターは、つくば地域で活動している市民やグループなどの活動

や身近な生活情報を取材し、インターネットや携帯電話を用いて、記事や音声、映像をコミュニティポータルサイトのeコミュニティつくばやラヂオつくばに投稿します。また定期的に開催される編集会議に参加し、情報交換や地域学習、共同取材などを通じてネットワークを広げていきます。

そして、万一、つくば地域に大規模な災害が発生した場合には、市民災害レポーターとして、地域の被災状況や被災生活に欠かせない生活情報を収集し発信する役割が期待されています。

この養成講座の成果をふまえ、講座に参加した市民、ラヂオつくば、NIEDの関係者が集い、市民レポーター有志の総意に基づき、本年4月30日に「つくば市民レポーター編集会議」（市民活動団体）が発足しました。また同時に第1回編集会議が開催され、以降5月に第2回、7月に第3回が実施されました。

第1回編集会議（4月30日実施）では、(1)名簿の作成と利用方針、(2)世話人の選任、(3)平成21年度の計

画について審議のうえ、承認されました。主な活動として、月次での定例会議や分科会活動、活動報告会（公開シンポジウム、フォーラム）、市民レポーター養成講座の実施、ラヂオつくばの提供番組企画や運営などを確認しました。

第2回編集会議（5月29日実施）では、設立記念シンポジウム企画、分科会・勉強会についてのアイデアや提案、WEBサイトやシステムの利用などを議論しました。

第3回編集会議（7月20日実施）では、6月27日に実施された設立記念シンポジウムの反省会として、来場者のアンケートや市民レポーターへの企画提案をめぐり意見交換が行われました。「スクールコミュニティ37」（10ページ参照）や「つくば100選」（12ページ参照）などの企画については、市民レポーターが数人でチームを組んで取材することが提案されました。また併せて、NIEDが提案している住民

参加の地域ドラマづくり（24ページ参照）についても話し合われました。

さらに同日、時事通信社防災リスクマネジメントWeb編集長の中川和之さんをお招きし、「伝えるってなんだ」をテーマに、市民レポーター養成講座(2)が開催されました。

市民レポーターの活動は、市民ネットワーク組織である「つくば市民レポーター編集会議」によるボランティア活動によって推進されています。NIED、eコミュニティつくば、ラヂオつくばは協働で、同団体の活動ならびに市民レポーターの養成を支援しています。

eコミュニティつくば  
地域密着型のポータルサイト。専門的な知識がなくても操作できるCMSという仕組みを活用し、地域のコミュニケーションの向上に寄与することを目指しています。また防災や防犯にも役立つ機能を搭載し、NIEDの災害リスクガバナンス研究プロジェクトの実証実験の場でもあります。



第1回編集会議の様子

## 「市民レポーター養成講座」 の概要

本講座は、つくばとその周辺地域に在住／在勤／通学している方々を対象に、つくば周辺地域の身近な話題や役に立つ生活情報、市民やグループの活動などを市民の目線で取材いただき、パソコンやインターネット、携帯電話などを使用しつつ、ブログやラジオ放送などを通じて情報発信することにより、市民協働をプロデュースする市民レポーターの養成を目指すものです。

スタートは2009年3月の4回の講座で、4月の市民レポーター編集会議発足後は、同団体の主催によりさらに2回の講座が実施されています。

### 市民レポーター養成講座

2009年3月1日、15日の両日、午前と午後の各2回計4回の講座が、NIED セミナー室にて開催されました。初めてとなるこの講座には「大好きなつくばの魅力をもっと伝えたい」「自分にできることで何か地域に貢献したい」といった思いをお持ちの方々に受講いただきました。

最初に、市民レポーターのあり方やその可能性について説明し、その後ラヂオつくば（つくばコミュニティ放送

株式会社）社長の増田さんより、日常の取材活動で注意すべき点やマナー、記事の作成方法などについて、プロフェッショナルの立場からアドバイスをいただきました。また受講者には、実際にパソコンや携帯電話を利用した記事の作成や投稿を体験していただきました。

この講座を通して、今後、市民レポーターの方々には、定期的に開催される編集会議に出席いただくとともに、取材テーマや情報発信のポリシーなどに関する討議にも参画してもらい、各種情報交換や地域学習、共同取材などを通じてネットワークを広げ、市民協働をプロデュースする活動に携わっていただく予定です。

また万一、つくば周辺地域に大規模な災害が発生した際には、有志の方々に「市民災害レポーター」として地域

<講座プログラム>  
はじめに  
【市民レポーター養成講座の目的と今後の活動について】（長坂俊成）  
自己紹介（参加者全員）  
講義  
【市民レポーター養成講座概論】（三浦伸也）  
【報道メディアプロフェッショナルからのアドバイス】（増田和順）  
ハンズオン  
【防災科研の開発システムを実際に使用した体験学習】（岡田真也）  
総括（坪川博彰／長坂俊成）

の被災状況や被災生活に欠かせない生活情報を収集し発信する役割も担っていただけるよう、システムを含めた体制の整備を図っていく予定にしています。

「つくば市民レポーター編集会議」発足後は、同団体の主催により、これまでに2回の養成講座が開催されています。いずれも講師に時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長の中川和之さんをお招きしました。また「伝える」ための表現方法の一手法として、次ページのワークシートを活用しながら、受講者の問題意識や関心事を引き出すとともに、それを取りまとめるための技法を学びました。

### 市民レポーター養成講座 2009（1）

2009年6月15日19～21時につくば市市民活動センターにて開催されました。テーマは「みなさんはすでにメディアだ！」。

NEWS とは、「社会に出来事を広く告げ、知らせること」、社会にはいろいろなサイズがあり、それによって何がNEWSになるかは変わる、というお話がありました。受講者からは、「おもしろい記事を書くためには」「市民レポーターがやってはいけないこと」などが質問されました。

この講座の内容については、19～23ページの「ビデオメッセージ：市民レポーターへの期待～平常時と災害時～」に掲載しています。

### 市民レポーター養成講座 2009（2）

2009年7月20日19～21時につくば市市民活動センターにて開催。「伝えるってなんだ」をテーマに中川さんからお話をいただきました。

また市民レポーターという第3者の視点に立って、自分の住んでいる地域の魅力を定義し、それらを表す形容詞をイメージすることや、地域の時間的な変化を捉えることで、地域の内外にレポートする取材のアイデアを抽出する方法を体験しました。

さらに、それらの記事を口コミや張り紙、回覧板、コミュニティFM、CATV、WEBサイト、マスメディアなどさまざまなメディアにどのように発信するかについて考え、意見交換が行われました。



ワークシート2 あなたが、ワークシート1で書いた自慢や、災害対策の備えを他の人に伝えるために、次のメディアはどう使えますか。そこでは何を伝えられますか？

氏名： \_\_\_\_\_

口コミ	
張り紙	
町内・自治会だより	
所属団体の広報紙	
行政の広報紙	
全国紙	
地方紙	
タウン誌・地域紙	
書籍	
雑誌	
全国放送のテレビ	
ローカル放送TV	
CATV	
全国放送ラジオ	
ローカルラジオ	
コミュニティFM	
ホームページ	
ネット掲示板	
メーリングリスト	
メールマガジン	
CD/DVD	
その他	

**ワークシート1：まちの魅力を伝えよう！**

(1) 次の文章を穴埋めして下さい  
私の暮らしている(A)で、他の人に自慢したい魅力(好きなところ・人物)は(B)です。それは(C)だからです。

A	B	C

(2) その魅力(好きなところ・人物)にふさわしい形容詞をたくさん上げてみて下さい

--

(3) その形容詞にふさわしい具体的事実を、細かいことでも何でも、たくさん書きだして下さい。

--

(4) その自慢したい魅力に、最近、何か変わったことはありますか？ 次の文章に○をして選択し、穴埋めして下さい。  
最近、その魅力が(少し/かなり)、(よく/わるくなってきていると感じています。その理由は(D)だからです。もっとよくするために(E)があったらいいな。私も(F)のお手伝いなら出来ると思います。

D	E	F

**養成講座を受講して（市民レポーター／村上弘美さん）**

**養成講座 2009（1）：『みなさんは既にメディアだ！！』**

「ニュース」とは？「社会」とは？「情報」とは？

中川さんから嵐のように投げかけられる疑問。講座第1回は、普段何気なく使っている用語について、意味の枠組みを取り払うことから始まり、後半はワークシートで文章作成の実践、というプログラムでした。テーマは「まちの魅力を伝えよう！」。テンプレートの穴埋めで「まちの魅力」を伝えるための文章作成が簡単に出来ました。単語を入れ替えれば、今後の記事作成にも生かせます。

冒頭に中川さんから投げかけられた疑問で、認識の基盤が揺らいだ後。ワークシートでの作業を進める中で、市民レポーターの立ち位置がわかってきました。市民レポーターは、市民の目を持つこと。身の周りの小さなことが、ニュースになること。発信する情報が「ニュース」であればよいのです。（詳しく知りたいかたは市民レポーターに参加してみてください！）。また、災害時には、「情報＝もうひとつのライフライン」となることを、市民レポーターの役目として覚えておきたいです。

**養成講座 2009（2）：『伝えるってなんだ！？』**

これまで私は伝えたいことも意識することなく、何となくブログを書いていたが、市民レポーターとして発信するにはそれでは不十分です。講座第2回は「伝える」ことについて、掘り下げて考える機会をいただきました。

- 1 ニュースとは、新しさや珍しいこと。事の大小問わず！
- 2 伝え方の上手さよりも、企画、切り口！
- 3 十分な下調べをして取材に臨む。記事作成は、材料を削り込む作業！
- 4 短い時間に伝わってなんぼ、見出しが勝負。基本は事実の積み重ね。
- 5 文章力や表現力より、事前取材で何が気になったか。取材結果から何を感じ、何を伝えたいと思ったか。

もうひとつ中川さんのお話から分かったのは、ニュースを仕立てるにはいろいろな側面から書く、ということ。手分けした取材や、長期間にわたる共同作業が必須です。現在は、各々が記事を投稿しているだけの市民レポーターの活動ですが、一つのテーマにどう取り組んでいくか。次の目標が見えたように思います。

## 市民レポーターについて

### 市民レポーターとは



つくばとその周辺地域に在住／在勤／通学している方々を対象に、つくば周辺地域の身近な話題や役に立つ生活情報、市民やグループの活動などを市民の目線で取材いただき、パソコンやインターネット、携帯電話などを使用しつつ、ブログやラジオ放送などを通じて情報発信していただきます。

市民レポーターの活動は、市民レポーターのネットワーク組織「つくば市民レポーター会議」によるボランティア活動です。

### 市民レポーターの活動

#### (1) 身近な情報をインターネットやラジオに投稿



つくば地域で活動している市民やグループなどの活動や身近な生活情報を取材し、インターネットや携帯電話を用いて、記事や音声、映像をコミュニティポータルサイトのeコミュニティつくばやラジオつくばに投稿。グルメレポート、育児レポート、防災レポートなど多岐に渡ってさまざまな情報を発信。

#### (2) 定期的開催される編集会議に参加



市民レポーターは、定期的開催される編集会議に参加し、情報交換や地域学習、共同取材などを通じてネットワークを広げ、市民協働をプロデュースします。

#### (3) 地域に根差したコミュニティの形成



「つくば市民レポーター」の活動を通して知り合った人たちと、コミュニティを形成し、グループとしての輪を広げていくことが可能です。もちろん個人として活動していただいてもOK。活用の仕方はあなた次第です。

#### (4) 災害発生時には、市民災害レポーターとして情報発信



万一、つくば地域に大規模な災害が発生した場合には、市民災害レポーターとして、地域の被災状況や被災生活に欠かさない生活情報を収集し発信する役割が期待されます。もちろん、この活動は災害時にも情報を発信できる状況の方だけで大丈夫です。

## つくば市民レポーターに参加してみませんか

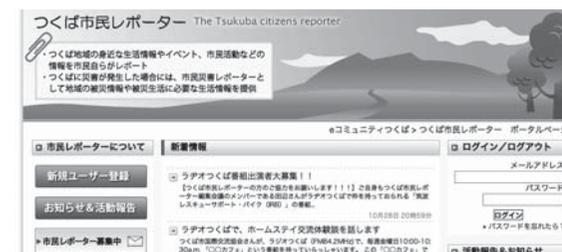
市民レポーターは、随時募集中です。つくば市民レポーターと一緒に活動してみませんか？ ふるってのご参加をお待ちしております！

### 参加資格

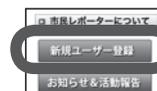
- ・つくば地域に在住、在勤、通学している方々で、インターネットや携帯電話の電子メールなどを用いて情報を投稿できる方。
- ・毎月1回程度、市民レポーター編集会議(平日または土日、1回2時間程度、会場はセンター地区他で開催予定)に出席できる方。
- ・参加費は無料。市民レポーターの活動はボランティアですので、各自の活動にかかる費用は個人の負担となります。

### 参加申し込み

<http://reporter.e298.jp/> にアクセスしてください。



- ① 左側の「新規ユーザー登録」メニューをクリックしてください。
- ② 必要事項をフォームに入力して送信してください。ユーザー登録が完了したら、ログインし、マイページを作成します。
- ③ ポータルページ左側に表示される「このグループに参加」の青いボタンをクリックしてください。
- ④ 管理人からの承認後、記事投稿が可能になります。市民レポーターの活動開始です！



## 市民レポーターの取り組み紹介

各市民レポーターは、普段はつくば地域の身近な生活情報やイベント、市民活動などを市民自らがレポートしています。レポーターの方々は多様性に富んでおり、つくばの自然や環境、グルメ、子育てなど、さまざまな分野のレポートがなされています。

一方、災害時には災害レポーターとして情報を発信しています。例えば、今年（2009年）の10月8日、台風18号の影響で道路が冠水、不通になるというレポートがなされました。

上記のように、現時点での取り組みは、各市民レポーターによるレポートが主となっております。今後は、各人だけではなく、チームで取材する取り組みも行っています。

### チームづくりと取材テーマの決定

第5回目の編集会議では、今後、チームでどのような取材を実施していくか、共同取材のテーマについて検討がなされました。これまでに取り組んでいる各小学校の地域の状況を取材する「スクールコミュニティ37」の企画に加え、つくば地区の自然環境やつくば地区の研究所の取り組みの紹介、37の小学校区の地区ごとに防災、交通、福

祉、食、子育てなどの課題や取り組みを紹介するなどのアイデアが出されました。その中で、つくば駅から南西約2kmにある松代保育所にお子さんを預けている市民レポーターの方から、保育所における災害時の子供の引き取りや父兄が引き取りに行けない場合の対応などについて、知り合いの父兄や保育所に取材してみたいとの提案がなされました。この提案に合わせて、他のレポーターが市の計画上の取り扱い、福祉避難所や学童保育との関係、松代保育園の周辺地域の大地震の際の被害想定など災害に関する情報の収集を分担して行うこととなりました。こうして、松代保育所周辺地区の防災をめぐる取材チームが出来上がったのです。

### DIGの実施

取材をするに当たり、松代周辺の状況を知ることが重要です。そこで、市民レポーターでもあり防災士でもある方の提案で、第6回目の編集会議ではDIG（災害想像ゲーム：Disaster Imagination Gameの略）を実施することになりました。DIGは、参加者同士が話し合いをしながら、地図を用いて地域で発生する災害の特徴を共有し対策を検討する手法のひとつです。NIEDが開発したeコミマップから出力した

A0の地図（航空写真、都市地図、つくば市の地震危険度マップ）を用いて、保育所や公共施設、道路などの位置を確認し、昔の地図（明治16年の迅速図及び1970年代の航空写真）と現在の地図を比較し、各地点が持つ特徴やエピソードなどを交えながら、松代地域の状況を共有しました。70年代、松代地域は田畑が広がり、たくさんの用水路がある地域であったことが分かり、場所によっては地盤強度に懸念があるところもあることが共有されました。

### 調査結果の共有

第6回の編集会議では、各レポーターで分担して調査した災害に関する状況の報告もなされました。保育所が要援護者の避難所に指定されていることについてつくば市保健福祉部社会福祉課に問い合わせたレポーターからは、要援護者の把握している段階で福祉避難所として受け入れるための整備はこれからであることが報告されました。また、ラヂオつくばと市との災害放送に関する協定など、災害時における被災した市民に向けた情報提供の仕組みづくりの準備が進められつつあることが報告されました。保育所に子供を預けている保護者へのインタビューでは、保育所に提出した父兄以外の連絡先の

方が災害時に実際に子供を引き取りに行けない場合があるなどの実態が報告されました。

### 今後の取材予定

実際に災害が起きた場合、どうするか？ 行政の備えに加え、地域の方々、保育園の保育士の方々も防災に取り組むことが求められます。また、地域は子供だけでなく、高齢者や障害者などの災害時要援護者への対応などの問題も抱えています。これらの問題を解決するためには、さまざまな主体の知恵を集め、一緒に対策を検討することが必要でしょう。市民レポーターでは、松代住民の方々や区会、保育所をはじめとする主体にリレー方式でインタビューを実施し、松代地域の災害対策のあり方について投げかけていく予定です。このように、市民レポーターには、課題の発見から解決までの市民協働をプロデュースする役割も期待されます。



DIG実施の様子

### 3. 「eコミュニティ・プラットフォーム2.0」について

#### 「eコミュニティ・プラットフォーム2.0」とは

eコミュニティ・プラットフォーム2.0(略称 eコミ2.0)は、NIEDが「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」注1)の一環として開発した、地域社会を支える参加型のコミュニティ Web システムで、「つくば市民レポーター編集会議」もこのシステムを活用しています。

eコミ2.0は、人と人がつながるきっかけをつくり、それを深め、さらに広げる場所を提供します。そして、地域住民の方々やコミュニティが自由・活発に意見交換や情報共有を行うことで、自らの問題を一緒に考え、解決に向けた第一歩を踏み出すお手伝いができると考えています。

#### 【eコミで利用できる機能】

eコミ2.0ではさまざまなツールを用意していますが、本稿ではその一部をご紹介します。

##### (1) ブログ機能

ブログ(日々更新される日記的な

Webサイトの総称)機能を使って、気軽に日常的に情報を発信し、コメント欄を利用してディスカッションをすることができます。

##### (2) 掲示板

いろいろな人たちが集まって意見交換や議論ができる場としてご利用いただけます。コミュニティ内で地域の問題を話し合うことや、他のコミュニティと議論することで交流を深めることができます。

##### (3) マップ機能

地図を使った情報共有が可能です。アイコンや自由線、枠囲いを用いた柔軟な情報の登録・記入ができます。身近な情報から地域の問題までさまざまな用途に利用できます。より高度なマップの機能はeコミマップと呼ばれ、eコミ2.0の中で重要な機能の一つとなっています。詳しくは53ページをご覧ください。

##### (4) カレンダー機能

お互いのスケジュールを共有することができます。イベントの告知等にも利用できます。

##### (5) RSS 機能

各種 Web サイトが発信している、

情報の見出しであるRSSを自動的に集めて、自分のページの中に表示することができます。逆に、自分たちが発信した情報(ブログ等)も、RSS機能を利用して配信することができます。

##### (6) 携帯電話によるアクセス機能

携帯電話からeコミにアクセスすることができます。いつでもどこからでも、eコミに情報を発信し、また、eコミから情報を取得することができます。

##### (7) その他の機能

メール配信機能、スキン変更(画面デザイン等)機能など、Webページを楽しく簡単・便利に使いこなして、より豊かなコミュニケーションを実現するさまざまな機能を用意しています。

#### 【想定しているユーザーと利用方法】

(1) 市町村等自治体では、参加型の地域コミュニティ Web サイトや住民

向け個人ポータルサイト、地域SNS、地図ポータルサイトを容易に構築し運用することができます。

(2) 住民や町内会、自治会、連合町会等の住民組織の情報共有や活動支援ツールとして掲示板や地図等を作成し、一般に公開する情報と非公開にする情報(関係者だけに公開する情報等)を分けて情報提供・共有することができます。

(3) 包括的な地区自治組織(ネットワーク)、例えば複数の町内会や各種地域団体から構成される地区内分権型の住民自治組織による包括的な地域経営の運営ツールとして、市町村や区役所・支所、NPO、事業者等のサイトやシステムと相互に連携して利用することができます。

(4) 市民活動団体、NPO、コミュニティビジネス等におけるさまざまな活動や



つくば市民レポーター WEB サイト  
(<http://reporter.e298.jp/>)

交流、協働を支援する中間支援プラットフォームとして、また、市町村や事業者、福祉団体等との市民協働をプロデュースするツールとして利用することができます。

(5) 市町村や都道府県等の行政界をまたがる複数の住民組織や市民活動団体等が、広域的に連携して課題解決やプロモーションを図る協働ツールとして、また、遠隔の住民組織が相互に連携するツールとして利用できます。

(6) 各種地域団体、PTA、事業者、大学等研究機関など、新たな公共や地域経営のパートナーとなる各種地域団体等が、それぞれ汎用的な目的で利用し、必要に応じて自治体等の上記の各種利用主体と相互に情報を交換・共有し、サービスを連携することができます。

(7) 町内会を基盤とする自主防災組織や住民主体の避難所運営組織が、平常時および災害時に上記(1)～(6)の主体と協働し、地域内外の社会資源や人的ネットワークを活用して、地域防災力および災害対応力を高めるためのツールとして利用することができます。

#### 【e コミの管理・運用方法】

e コミは、自治体の公式ホームページや地域コミュニティサイトの構築・運用・管理に必要な多種多様な機能を提供しています。作成する各ペー

ジには、ブログや掲示板、メーリングリスト、スケジュール、アンケート等のパーツを自由に配置し利用することができます。このようなシステムをCMS (Contents Management System、コンテンツ管理システム) といいます。

e コミを管理するのに特殊なツールは一切不要で、無料の汎用的な Web ブラウザーさえあれば、Web サイトのほとんどすべてを管理することが可能となっており、運用・メンテナンス作業の負担も非常に軽くなっています。

#### 【e コミの無償提供とサポート体制】

##### (1) 提供ポリシー

本システムは、政府が推進する「イノベーション25」の「社会還元加速プロジェクト」のひとつとして位置づけられている、「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」プロジェクトの一環で開発したものです。そのため、その研究成果を速やかにかつ幅広く社会に還元することが求められています。そこで、商用／非商用の目的を問わず利用料を無料にするとともに、ソースコードを無償で公開することを原則としています。

##### (2) サポート体制

本システムは研究開発の途上であり、今後もさまざまな機能拡張や改良を行う予定です。しかし、調査・研究

それ自体を目的に開発されたこれまでのシステムとは異なり、最終的には社会に還元・実装されることを目指していますので、日常的に実務で利用できるよう、社会基盤としての汎用性と拡張性を最大限考慮して開発しています。そのため、開発の初期段階から公民が連携して開発を推進するという開発方針に則っています。

今後は一般へのシステムの公開や利用提供を通じて、全国の事業者やNPO等の方々と開発コミュニティのネットワークづくりを推進する予定です。

#### 【実証実験参加団体の公募と参加方式】

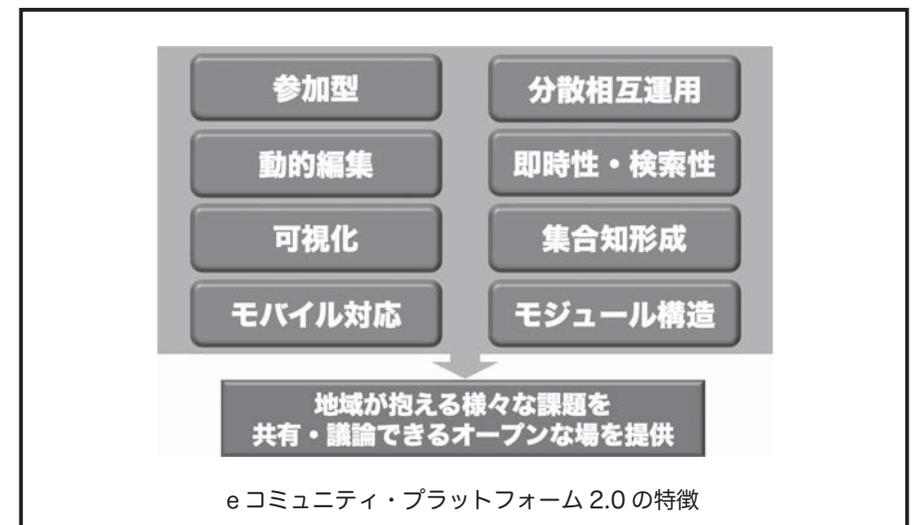
NIED では自治体、住民組織、NPO 法人等を対象に、本システムを利用した実証実験への協力団体を募集してい

ます。選定された協力団体に関しては、NIED がシステムの導入・運用を支援します。参加方式には、NIED が用意したサーバー環境を利用するタイプと、参加団体自身がサーバー環境を用意するタイプがあります。

さらに自治体等が保有している都市計画図や航空写真、各種ハザードマップ等を相互運用型の地図配信サーバーにデータ登録することにより、e コミマップでそれらを活用するといった取り組みを行うことが可能です。

実証実験の参加団体が独自に相互運用型の地図配信サーバーを用意できない場合には、NIED が用意している共用のサーバーをご利用いただけます。

NIED から提供される e コミの利用コースには以下の3つがあります。



### (1) お試しコース



<http://trial.ecom-plat.jp/>

お試しサイトでユーザー登録していただければ、すぐにeコミの利用を開始することができます。eコミの雰囲気とその可能性をてっとり早く把握していただくのに最適です。さらにeコミを利用して本格的な運用を行う場合には、以下の(2)もしくは(3)のコースに進んでいただきます。

### (2) サーバーレンタルコース

eコミを実際に運用してみたいが、自前でサーバーを構築して運用することまではしたくない、またはできないといった場合におすすめのコースです。NIEDが提供する無料サーバー上に各利用者向けの専用サイトを設置・提供しますので、それを利用して実際の運用を行うことができます。

### (3) サーバー自前構築コース

自前のサーバーをご自身でご用意いただいた上で、そこにeコミをインストールしていただき、運用を行っていただきます。

いずれのコースも利用登録もしくは

利用申請を行っていただく必要があります。詳しくは下記のURLのウェブページをご覧ください。

<http://www.bosai-drip.jp/ecom-plat/course.htm>

### 【eコミの今後】

現在、NIEDでは、本システムを用いて、地域社会の新たな公共と地域経営を支援する運営手法の実証実験や、個人や地域の防災力の向上を支援する各種アプリケーションシステムの研究開発に取り組んでいます。例えば、自主防災組織や住民主体の避難所運営組織が地域の災害リスクを総合的に評価し、それらに基づき被害を想定して、地域資源や社会的なネットワークを生かした具体的な対策を検討する、といった一連の流れを総合的に支援するアプリケーションシステムや、地域ケアの包括的な事業継続計画の策定を支援するシステムの開発に取り組んでいます。

\*注1)

「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」は、2007年に閣議決定されたわが国の長期戦略指針「イノベーション25」(2025年までを視野に入れ、研究開発や社会制度の改革等、中長期にわたって取り組むべき施策)の中で特にその成果を社会に早期還元すべき先駆的プロジェクト「社会還元加速プロジェクト」のひとつとして位置づけられたものです。

### eコミマップで地域に役立つマップを簡単作成

eコミ2.0の拡張機能のひとつとして、「eコミュニティ・プラットフォーム2.0マップ」(以下、eコミマップ)を開発しました。その最大の特徴は、オリジナルの地図を簡単に作成し、イ

ンターネット上にさまざまな方法で共有・公開できる点にあります。



### eコミマップの5つの特徴

#### 【1】さまざまなオリジナル地図を自在に作成可能

商店街マップ、グルメマップ、環境マップ、防災マップ、防犯マップ等、さまざまな目的の地図を作成し、公開することができます。また情報発信のツールとして使うことや、地域の課題や問題を議論するためのツールとして使うことができます。

#### 【2】地域の情報集約と協働関係づくりを支援するオープンな地図の作成が可能

一人でマップを作るだけでなく、地域のいろんな人が力を合わせて地域やコミュニティ全体で共有するマップを作ることができます。マップの画面をクリックするだけで容易に情報を追加登録できますので、幅広い人々の参加を得て、これまでは成し得なかった、地域にとって本当に役に立つ地図を作成できる可能性を秘めています。

#### 【3】多彩な地図を簡単印刷

作成した地図をパソコンのディスプレイ画面に表示して眺めるだけでなく、お住まいの壁や冷蔵庫に貼り出してご覧になりたい方も多いでしょう。eコミマップでは、印刷オプションのきめ細かい設定が可能で、家庭用や業務用のさまざまなプリンターの用紙サイズに柔軟に合わせて印刷できる機能があります。さらに、印刷した紙をタイル上に並べることで、家庭用プリンター等では通常は印刷できない大判の紙地図を出力することも可能です。

#### 【4】携帯電話による投稿・閲覧が可能

パソコンの画面だけでなく、携行が容易で起動が速く、多くの人にとってより身近な存在である携帯電話から地図の閲覧や入力編集が可能のため、外出時や移動中の場合でも地図を気軽に活用することができます。

#### 【5】マップの公開(相互運用gサーバー)

自治体やコミュニティの管理者等が地図を登録・設定をすることで、国際規格に準拠したデータ形式でインターネットに公開し、誰もが利用できるようにすることができます。この仕組みを「相互運用環境」といいます。



## 参考資料

## 災害リスク情報プラットフォームに関する研究開発の紹介

### 研究の背景と目的

個人や地域が「リスク」を知り、ともに備えることのできる社会を目指して

私たちの生活は、地震、津波、噴火、豪雨、地すべり、雪崩などの自然災害の「リスク」と切り離すことができません。そこで、「災害リスク情報プラットフォーム（BOSAI-DRIP）」プロジェクトでは、これまでに培われた自然災害に関する科学的研究成果や被災経験・教訓などの「知」を最大限に活かし、一人ひとり、そして社会全体の防災力を向上させるためのイノベーションの創出に取り組みます。

#### ●変動する自然災害の「リスク」



これまで自然災害に対しては、堤防や耐震化などのハード対策から、ハザードマップの作成や配布などのソフト対策まで、さまざまな対策がとられてきました。しかし、それでも自然災害の「リスク」をゼロにすることはできません。自然災害の発生メカニズムの複雑さに加え、地球規模での環境変化や少子高齢化などの社会構造の変化により、私たち一人ひとりが被りうる自然災害の「リスク」は常に変動しながら存在しています。

#### ●「災害リスク情報プラットフォーム」の構築へ



自然災害を被る「リスク」が一人ひとりにある以上、「防災対策」も一人ひとりに必要です。そこで、防災科学技術研究所では、誰もが自らに被りうる自然災害の「リスク」を知り、自らに適した「防災対策」を立案・実行していく社会を目指し、そのための「素材（災害リスク情報）」と「道具・手段（プラットフォーム）」の研究開発に着手しました。

#### ●「イノベーション25」の社会還元加速プロジェクトとして



2007年6月1日に閣議決定されたわが国の長期戦略指針「イノベーション25」には、2025年までを視野に入れ、研究開発や社会制度の改革など、中長期にわたって取り組むべき政策が示されています。この中で、「災害リスク情報プラットフォーム」は、早期に社会還元すべき先駆的なプロジェクトとして、「安全・安心な社会」を目指した「きめ細かい災害情報を国民一人ひとりに届けるとともに、災害対応に役立つ情報通信システムの構築」することと位置づけられています。

# 研究開発概要

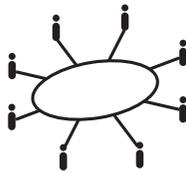
リスクの評価から具体的な備えまでを一貫して支援する

## ●最先端の「ハザード・リスク評価」を誰もが利用可能に



自然災害に備えるためには、被りうる自然災害のリスクについて知ることが必要です。そのためには、専門的な調査・研究によるリスクの可視化が重要となってきます。そこで、各種自然災害について、これまで培われてきた専門的な知見に基づくハザード評価、リスク評価を行い、その成果を可視化された「災害リスク情報」として提供します。その第一段階として、まずは地震災害を中心に研究開発を行います。

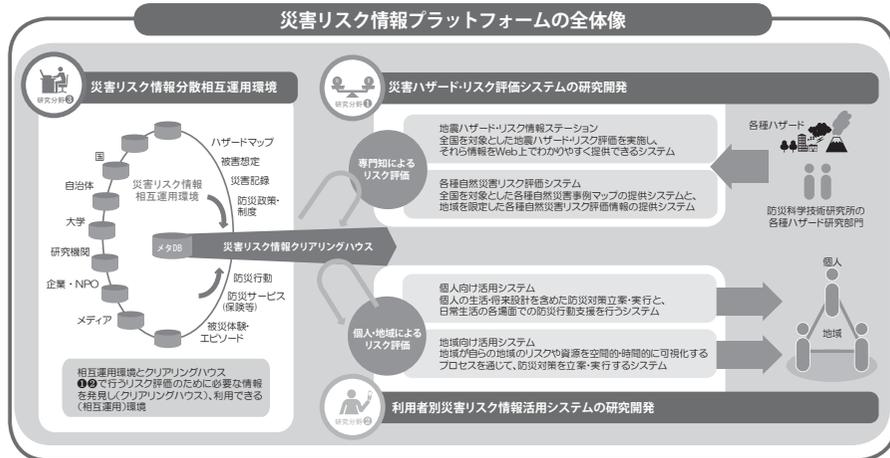
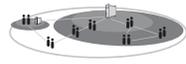
## ●「災害リスク情報」を活用して、個人や地域に適した備えを実現



変動し複雑化する社会においては、誰にも共通する唯一の防災対策を求めるのではなく、自らの状態や価値観、置かれた環境などに合わせて、それに適した防災対策を選択・創造していくことが重要です。そこで、得られる「災害リスク情報」をフルに活用し、個人や地域の特性に合わせた防災対策を立案し、実行できるサービスと手法の開発を行います。その第一段階として、まずは個人一人ひとりと地域コミュニティの防災対策を中心に研究開発を行います。

## ●災害リスク情報がいつでも利用できる「分散相互運用環境」

ハザード・リスクの評価や防災対策の立案、実行を効果的に行うためには、そのために必要な知識や情報がいつでも得られる環境が必要となります。そして、その知識や情報は一カ所にあるのではなく、社会を構成するさまざまな主体が分散して保持し、管理しています。そこで、その多様な主体が持つ知識や情報、すなわち「災害リスク情報」を相互に利用できるような情報環境の研究開発を行います。



# 研究分野①災害ハザード・リスク評価システムの研究開発

専門的な調査研究に基づいて、詳細で高精度な災害ハザード・リスク情報を作成し、配信するシステムの研究開発

## ●地震ハザード・リスク情報ステーションの構築

地震の被害を軽減するためには、個々人の地震への意識を高め、地震に対する備えを促すことが不可欠です。このため、日本全国で発生する地震を対象として、個々人が地震リスクを自分の問題としてとらえることができるリアリティーのある詳細なハザードマップやリスク情報を作成します。こうした情報を集約し、最新の技術を用いて、国民一人ひとりを対象とした、わかりやすく説得力のある情報を提供できる地震ハザード・リスク情報ステーションを構築し、広く情報公開し、また普及を行うと同時に、防災教育にも活用することを目指します。

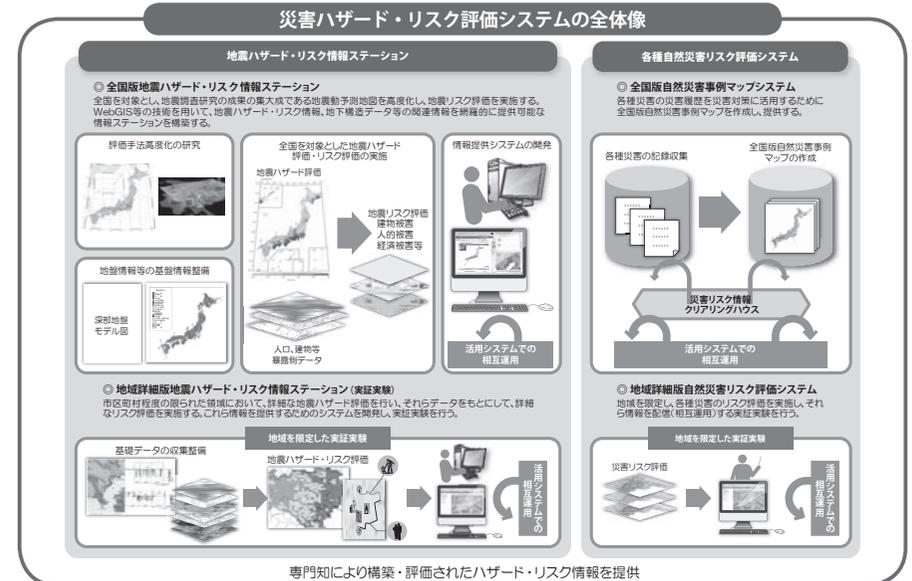
## ●手法開発、モデル構築から実証実験まで

具体的には、政府の地震調査研究推進本部で作

成が進められている地震動予測地図を高度化するための手法開発や地下構造モデルの構築を行います。それらに基づき作成・高度化された地震動予測地図の地震ハザードに関するデータにより、全国レベルでの地震リスク評価を実施し、それらデータを公開するためのシステムを開発します。また、地域を限定して詳細な地震ハザード評価を実施し、それらをもとにして詳細な地震リスク評価ができるシステムを開発し、実証実験を行う予定です。

## ●全国版自然災害事例マップシステムの開発

過去にその場所で災害が発生したという事実は、その発生原因を調べる上でも、今後の発生リスクを考える上でも、非常に重要な情報となります。そこで、全国で発生した各種災害の災害履



歴を今後の災害対策に活用するために自然災害事例マップを作成し、わかりやすく提供するシステムを開発します。

### ●地域詳細版自然災害リスク評価システムの開発

個別地域を対象として、そこで発生しうる各種自然災害のハザード・リスクを詳細に評価・提

供できるシステムの開発を行います。また、地域に発生しうる自然災害が単独であるとは限らないことを考慮し、このシステムと「地震ハザード・リスク情報ステーション」とを合わせ、「災害リスク情報活用システム」におけるマルチハザード・マルチリスクでの防災対策の立案や実行に資することを目指します。

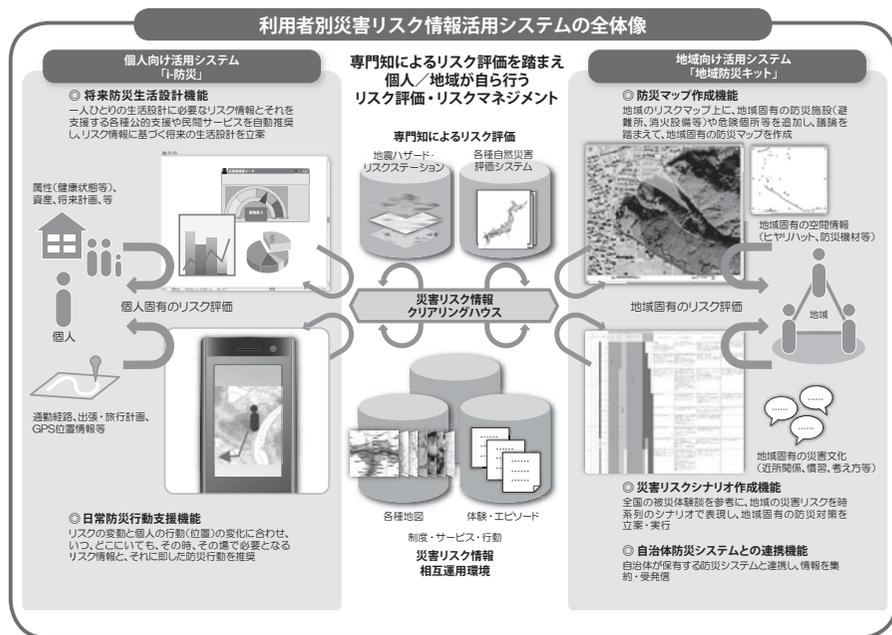
## 研究分野②利用者別災害リスク情報活用システムの研究開発

一人ひとり、そして地域に合わせて災害リスク情報を活用し、防災対策を立案・実行できるサービスと手法の研究開発

### ●個人向けシステム「i-防災」

個人一人ひとりを対象とし、「現在」と「将来」の2つの観点から、それぞれが自らに適した防災対策を立案し、実行できるサービスの研究開

発を行います。「現在」については、リスクの変動と個人の行動（位置）の変化に合わせ、いつでもどこにいても、その時その場で必要となる災害リスク情報と、その状況に即した防災行動を推



奨するサービスを開発します。「将来」については、自ら描く生活スタイルに合わせて有用な各種公的支援や民間サービスなどを推奨し、災害リスク情報に基づく将来の生活設計を立案できるサービスを開発します。

### ●地域コミュニティ向けシステム「地域防災キット」

コミュニティ内やコミュニティ間での協働を誘発し、その地域特性に合わせた防災対策の立案や実行のためのサービスの研究開発を行います。具体的には、避難所運営や要援護者支援などの地域における課題を解決するために、「マップ」という空間的な観点と「シナリオ」という時間的な観点から、自らの地域のリスクや防災資源を可視化し、相互にプロセスを通じて、地域固有の防災対策を立案し、実行するサービスを実現します。

### ●国・自治体・民間システムとの連携・連動

一人ひとり、そして地域コミュニティの防災

対策をよりよいものにしていくには、それを支える国・自治体・民間の防災制度やサービスとの連携や連動が不可欠です。例えば、個人の防災対策を支援する助成制度の推奨や、災害時にきめ細かな情報伝達を担うコミュニティ放送との平時からの情報連携など、つながるべきものがつながり、活用できるものは可能な限り活用できる仕組みと、そのような社会の実現に向けた研究開発を行います。

### ●リスクコミュニケーション手法と災害リスクガバナンス

一人ひとり、そして地域の防災力向上は「素材（情報）」や「道具（ツールやサービス）」の提供だけでは実現しません。それとともに「手段」としてのリスクコミュニケーションが不可欠となります。また、その基盤となるのが、多元的な主体による水平的で重層的なネットワークによる協働社会（災害リスクガバナンス）の構築です。ここでは、「素材」や「道具」、「手段」とともに、それを支える「社会」のあり方や政策についての研究開発を行います。

## 研究分野③災害リスク情報分散相互運用環境

分散して運用管理される災害リスク情報を相互に活用し合える環境の実現に向けた研究開発

### ●防災対策立案に資する災害リスク情報のあり方

防災対策の立案に有効な情報は、専門的な知見から作成されたハザード・リスク情報だけではありません。これまでに発生した災害の履歴、その災害により被害を受けた人の体験談やそこから得られた教訓、そしてこれらを踏まえた防災制度、サービス、推奨行動など、有用な情報は多種多様に存在します。これらの情報を「災害リスク情報」として一人ひとり、そして地域の防災対策に活かすためには、どのような状態で整備・管理されていくべきかについて研究開発を行います。

### ●災害リスク情報の動的利用のためのインターフェース

災害リスク情報をハザード・リスク評価や防災対策立案に活かすためには、それがいつでもすぐ利用できる状態にあること、すなわち分散管理される災害リスク情報の動的利用のためのインターフェースが必要です。そこで、国際的な標準化動向を踏まえ、ハザード・リスク情報の更新やシミュレーションのリアルタイム連携など、動的なインターフェースのあり方と実現に向けた方策について検討します。



つくば市民レポーターが目指すもの  
つくば市民レポーター編集会議設立記念シンポジウムの記録

---

2009年12月1日 第1刷発行

- 編者 独立行政法人 防災科学技術研究所  
災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト  
リスク研究グループ  
つくば市民レポーター編集会議
  - 編集協力 (株) 地域協働推進機構
  - 発行所 独立行政法人 防災科学技術研究所  
防災システム研究センター  
〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1  
Tel 029-863-7553 Fax 029-863-7541  
URL : <http://bosai-drip.jp/>
- 

ISBN978-4-9904635-2-6  
C0036